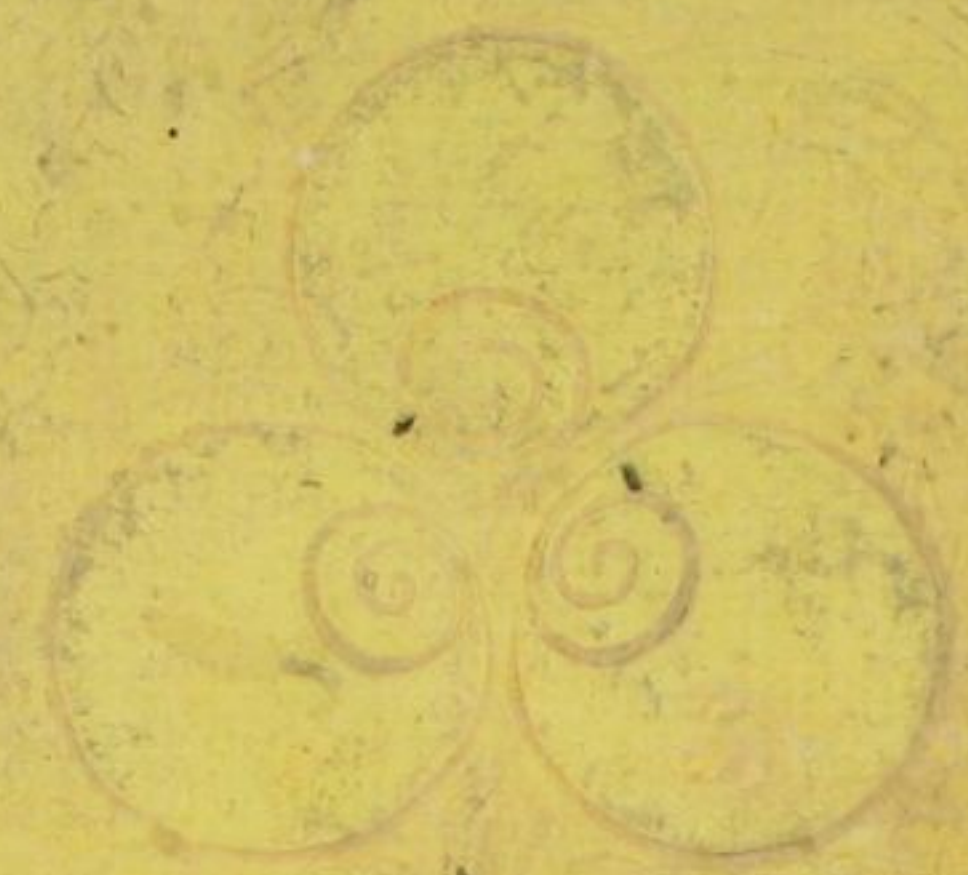


藝

嚴島圖會

卷之三



嚴島圖會卷之三

目錄

- | | | | | | | | | | |
|---------------------------|---------------------------|--------------------------|----------------------------|---------------------------|--------------------------|-----------------------------|-------------------------------------|-----------------------------|---------------------------|
| 長濱 <small>ながたま</small> | 姦懷 <small>くわんわい</small> | 金岡水 <small>きんがみづ</small> | 包浦神社 <small>ほうのうじや</small> | 上居淡 <small>かみゐるたま</small> | 伊豫松 <small>いよまつ</small> | 山伏房 <small>やまぶしむら</small> | 陶全善敗死所 <small>たうぜんぜんさうしほのころ</small> | 山白濱 <small>やましろくま</small> | 桃木浦 <small>ももきの</small> |
| 蛭子社 <small>へびこ</small> | 江浦 <small>えのうら</small> | 櫻川 <small>さくらがわ</small> | 献浦 <small>けんのうら</small> | 下居淡 <small>しもゐるたま</small> | 楷木浦 <small>かゐのき</small> | 吉海苔浦 <small>よしののり</small> | 關伽末 <small>せきがま</small> | 山白濱神社 <small>やましろくま</small> | 棟木浦 <small>むねのき</small> |
| 聖崎 <small>ひりき</small> | 枚浦 <small>はきのうら</small> | 火戾口 <small>ひもとくち</small> | 鷹巢浦 <small>たかののり</small> | 腰細浦 <small>こしなほ</small> | 藤浦 <small>ふじのうら</small> | 吉海苔浦神社 <small>よしののり</small> | 養父崎 <small>やぶさき</small> | 江浦 <small>えのうら</small> | |
| 蓬萊巖 <small>ほうらいいそ</small> | 枚浦神社 <small>はきのうら</small> | 包浦 <small>ほうのうら</small> | 鷹巢浦神社 <small>たかののり</small> | 腰細浦神社 <small>こしなほ</small> | 比目魚崎 <small>ひめがし</small> | 牛王社 <small>ごおう</small> | 養父崎神社 <small>やぶさき</small> | 早岡櫻 <small>はやおか</small> | 下り松浦 <small>さがるまつ</small> |

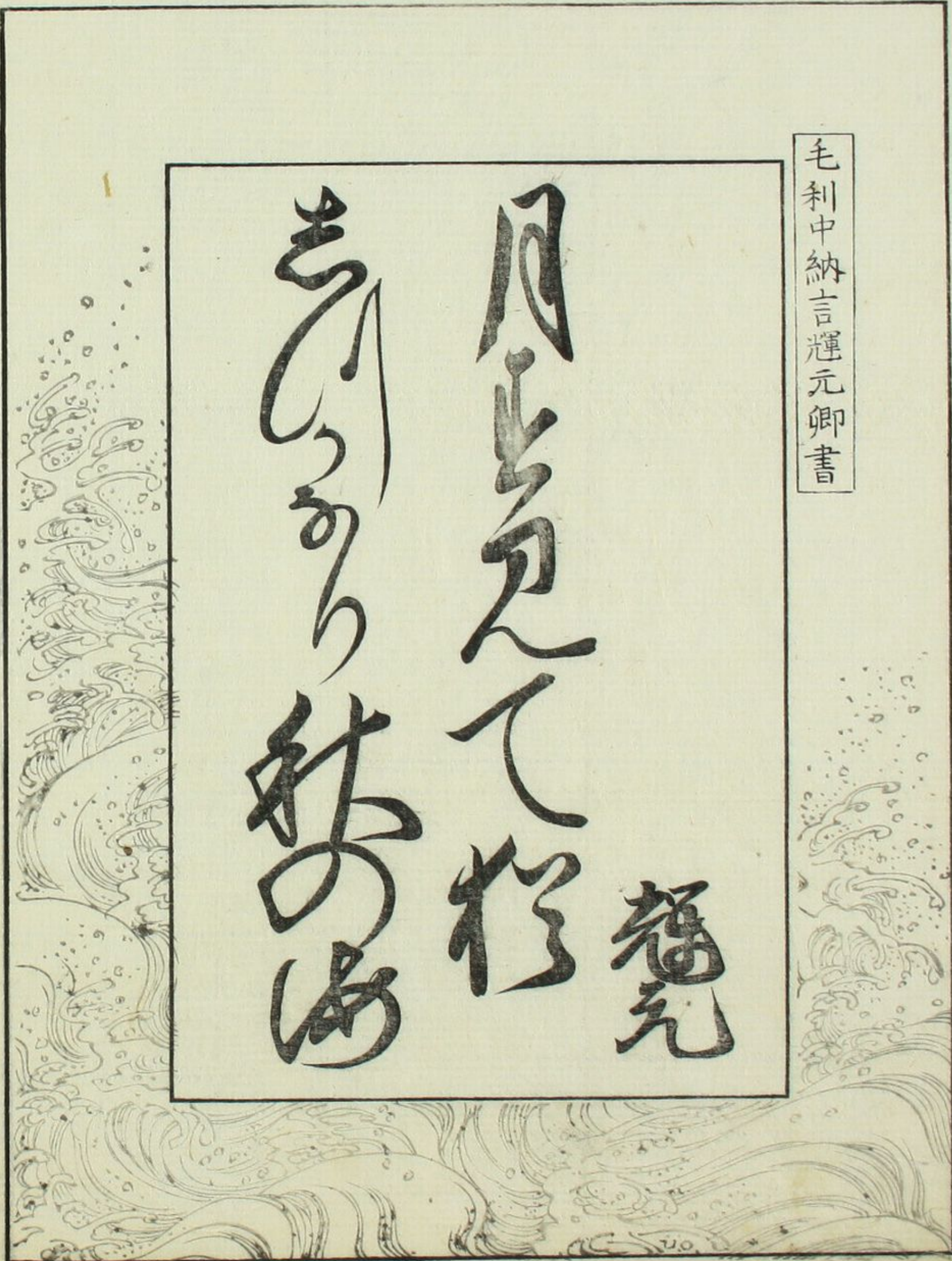


阿古島 あぐしま
 牛王社 ごおうしゃ
 御床浦 ごとこのうら
 大江浦 おほえ
 鷄泊 うのとまり
 網浦 あみ
 以上島巡の次第に依て記すところなり以下ハ大宮の後
 の方より起りて西町瀧町小坂なる
 長浦 ながうら
 須屋清水 すやのしみづ
 御床浦神社 ごとこのうら
 貝売塚 うひかづつ
 踏鞠浮 たづかひ
 蛭子社 えびこ
 浅黄櫻 あさきさくら
 須屋浦 すや
 新贅浦 にいひこ
 牛王社 ごおうしゃ
 内侍岩 うちわら
 繪浦 えま
 須屋浦神社 すやのうら
 猪子坂 いのこざか
 大川浦 おほがわ
 室濱 むろはま
 江浦 えうら
 預坊 あづま
 泉光院 せんくわう
 道祖神社 たごうそ
 廢真珠院 まのしんじゆ
 寶泉院 ほうせんいん
 大元浦 おほもと
 あと山 あとやま
 石風爐 いしふうろ
 大願寺 だいがんじ
 大元神社 おほのせんじ
 廢仙藏坊 せんのせんざう
 經の尾 きやうのび
 大藏坊 だざうぼう
 橘山 たちばなやま
 十五堂 いふごどう
 西町 にしまち

神廐 かみま
 多寶塔 たぼうたふ
 大湯屋趾 おほゆやあし
 金石 かんとく
 日宮 ひのみや
 瀧幸坊 たきまことぼう
 菩提院 ぼだいいん
 執行坊 しゆぎやうぼう
 荒神堂 あらいじんどう
 中江薬師 なかつかうし
 華藏院 けさういん
 廢多寶院 せいたぼういん
 南風燈趾 なんふうとうあし
 以中庵 いぢゆうあん
 龍燈院 りゆうとういん
 龍燈杖 りゆうとうじやう
 西方院 さいほういん
 東泉坊 とうせんぼう
 瀧薬師堂 たきやくしどう
 若宮 わかにみや
 地藏院 ぢざういん
 陶全姜陳所 たうぜんきやうぢんじよ
 廢瑞光寺 せいのみづからうぢ
 若宮原 わかにみやはら
 増福坊 ぞうふくぼう
 多閻坊 たもんぼう
 松坊 まつぼう
 棚守屋敷 たなもりやうぢ
 牛王社 ごおうしゃ
 廢連衆坊 せうれんしゆぼう
 行宮趾 かうみやあし
 紅葉谷 もみぢや
 大聖院 たいしやういん
 愛染院 あいせんいん
 影向石 やうがういし
 修善院 しゆぜんいん
 長樂寺 ちやうらくじ
 弘中戦地 ひろなかつせんぢ
 廢永元寺 せいえいげんじ

毛利中納言輝元御書

月よ見えんて行
きいり秋の海 福元



三ノ二

嚴島圖會卷之二

長濱 ながさき 一名八重濱

方五町の入江ありて沙濱潔白なりこの處にも櫻數株ありて花の

時觀賞はべし是より聖崎まで乃向小ななり浦大魚切浦清水が

浦米が浦扇風う浦木の名あり

蛭子社 えびこ 日取まはる拜殿

聖崎 ひかりさき 三十間ばかりの淵嘴ありて風景の処なり

蓬萊嶽 ほうらいのいそ

よもれうみ浪しづかなる時ふらひて聖を祀るとふ見つるを 曼珠院法親王

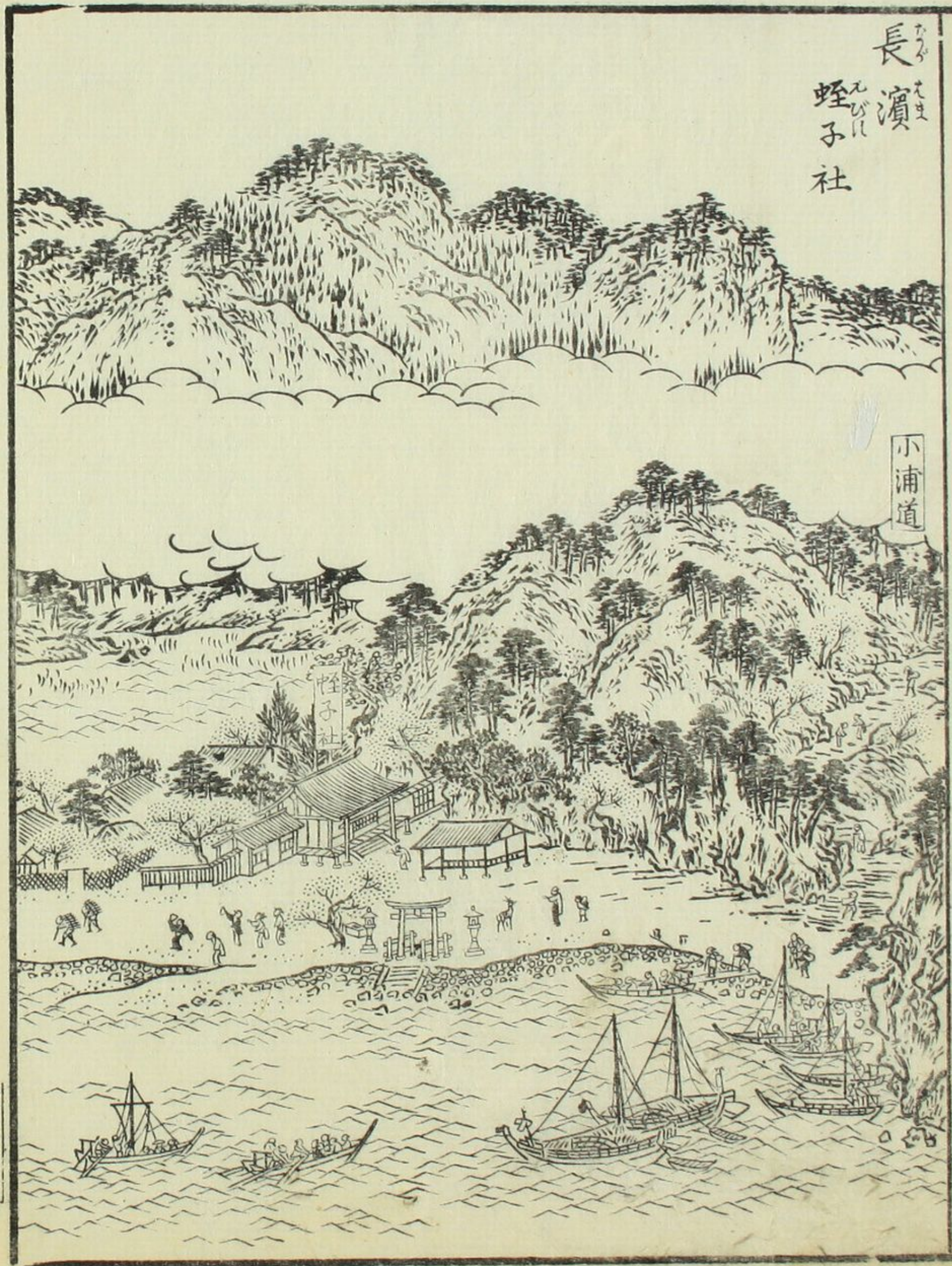
聖崎秋をなれて海水のうへわたせり嚴上小古松數株ありて海風り
もま礼容姿於のづから造りたるせむらびと一世に画づくたる蓬萊山とい
ふものな似たり故に名と次まて別小蓬萊と称するものあり三日月の

題長濱荒夷社廟壁
 石川文山
 華表立庭高突兀堂如
 神廟室桑門禪心本是
 無他佛江上青山不動
 尊



長濱
 蛭子社

小浦道



頃風恬々波穏々なる時此處より浮出づその粧ひ金銀瑠璃を以て砂と一其上松柏生茂り或ハ宮殿樓閣の象あり其莊嚴たぐへん物なり光明海上小彩きこりて次第小消滅をいまも佳く是れ見ゆる人あり多くハ丑日小現をといふその由縁を知り次近世橋南谿が著せる西遊記ハ安南國ハ屋樓ありといふハ恐らくハ是をいふなるべし

燒懷 入江ありこの處より東邊より波鏡ありありてこの名あるなるべし

江浦 入江

松浦 沙濱五町余松林あり一名相松の浦ともいふを傳ふ

松浦神社 祭神底津少童命 島巡身一の神

いく世をら次ぎの浦らなふく音も神まひまらけしを伝ふ

中納言持豊

金岡水 同浦より二町 かくまわり

この水法潔其例よして地海よりちう々れとも絶て鹹氣なき傳へる佐伯郡廿日市の洞雲寺金岡和尚此處小座禪せられたりその時をたえて涌出したりと被寺ももとより金岡水とらふ名水なりや水と名脈相通せりよもくハ権者修行の感應よよはる歎

櫻川 橋の本

火床 島巡の船中火清火せり者ありが愛ありて

包浦 仙渡三町あり

此浦ハ明神降降のむら一平農をくご置たまひりよより石ころく農の形なれりなむつみの浦と名づくよ徳太平記ハ尾をたり七浦の命なり

包浦神社 祭神塩土翁

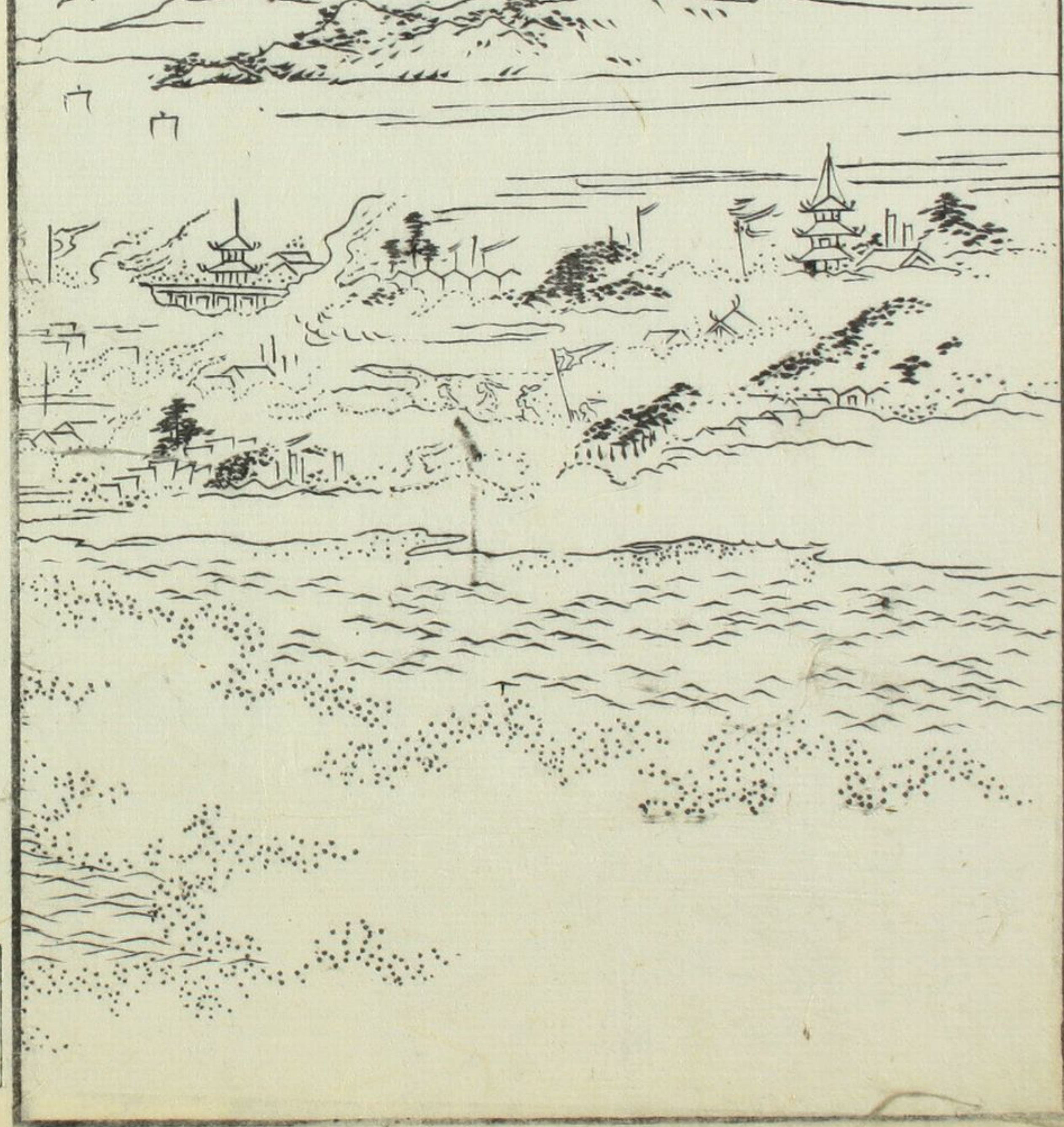


ひりこき
聖崎

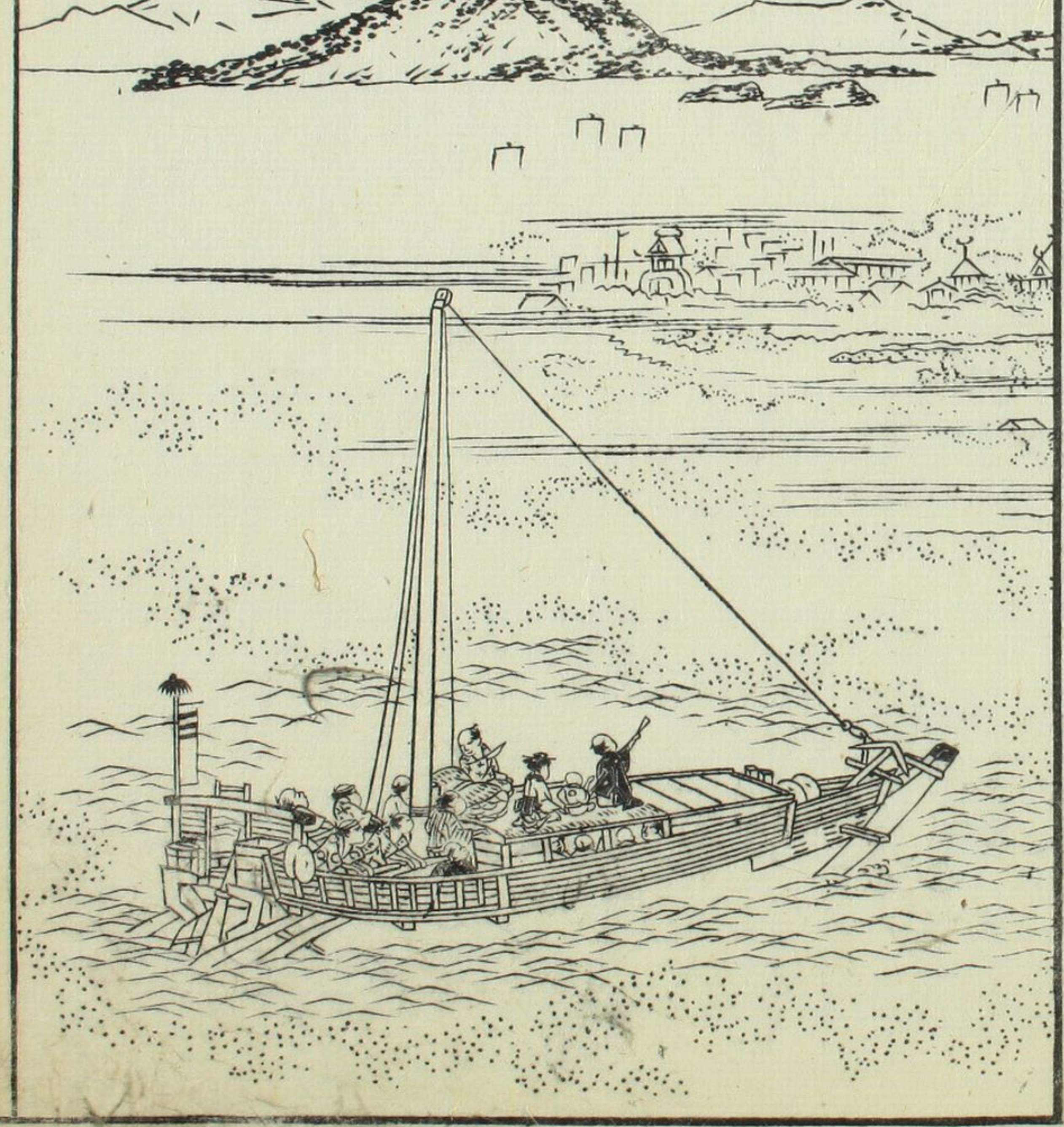
自宮島還草津
舟中 茶山
揭起孤蓬時指顧
仙山只在雲深處
江天千雨渺茫中
短艇嘔啞駛掉去



巖島海上は浮ぶ
 ところの蓬萊島
 との海氣のむき
 がれて種々の姿
 態をば何となく
 所謂蜃氣樓とい
 趣を同じくして其
 實は異なるもの
 蜃の蛟龍の属
 みしから小洋
 にはわらばらも
 見えぬあらはし



巖島四邊の海
 底はこれ沙金
 あり其金氣の
 濃きをば何となく
 精英の氣さる
 こころも
 あらう



太古の神武天皇西偏よりわたりて天下を平定したまひしと紀塩土
 孫惟慕の軍議小参りたまひ弘治元年毛利元就の陶全美
 を討れしと紀此浦より博奕尾を経て軍終り利を得しと
 後社壇を改め建て社領許多を附しつらりと社按ふこの神
 の義兵をたけつけて非道を誅したまふと歴史の載るころ
 瞭然たり士たち者いささか次請つるきこなり
 一布つちの訛つみと名をいひつらや

献浦 一所
 千献岩 同浦より平面の岩より長き五間或ふ口の義より
 鷹巢浦 石面ふ口の魚を列ふべし蓋漢人の言よりなるなり

鷹巢浦神社

祭神底筒男命 島巡才二
 の律規

と祀を木のうげもたらぬの浦浪をけりてなる神の祭

中納言持豊

上居濱 沙浜五町方二町
 の池あり水倉あり

下居濱 沙浜三町

腰細浦 沙浜三町
 入江あり

腰細浦神社

祭神中津少童命 島巡才三
 の社

伊豫松 同浦より高五六丈傳へり昔伊豫の人此浦より椎堂を取らり金載
 してもてつらひしはたまもち崇りつら此處よりつらうなるなり

夕ていなるいとはとこ細の浦より智やとげらるん

中納言持豊

楷木浦 沙浜三町

藤浦 沙浜二町

比目魚崎 鯨石ありを以て
 の名なり

比目魚石 形似たるを以て
 名つ

山伏返 島巡の時慢心よ長せし族は時ハ舟
 怪り今この名はも故あり

青海苔浦 沙浜二町

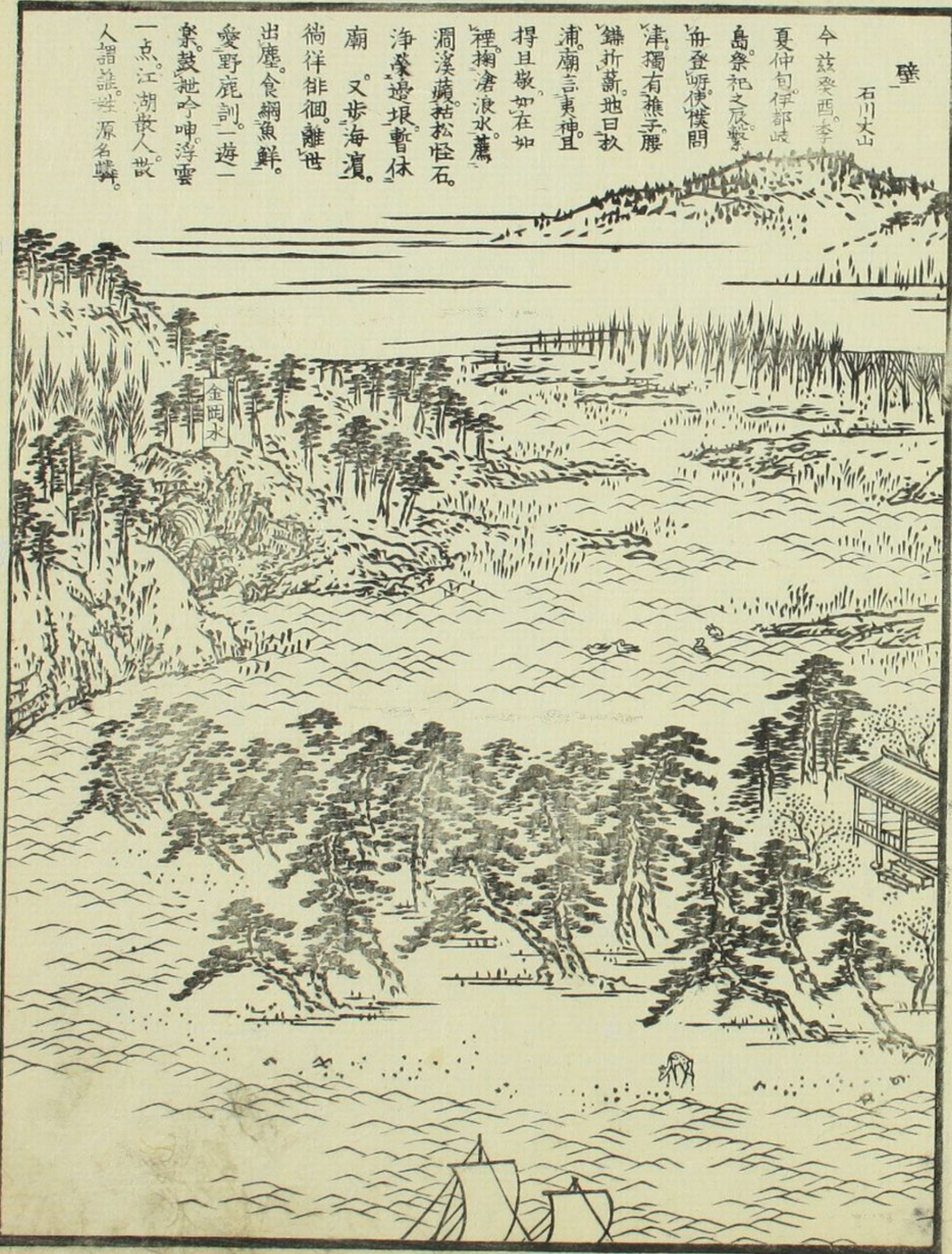


しまぐちの
島廻茅輪の番

島廻茅輪

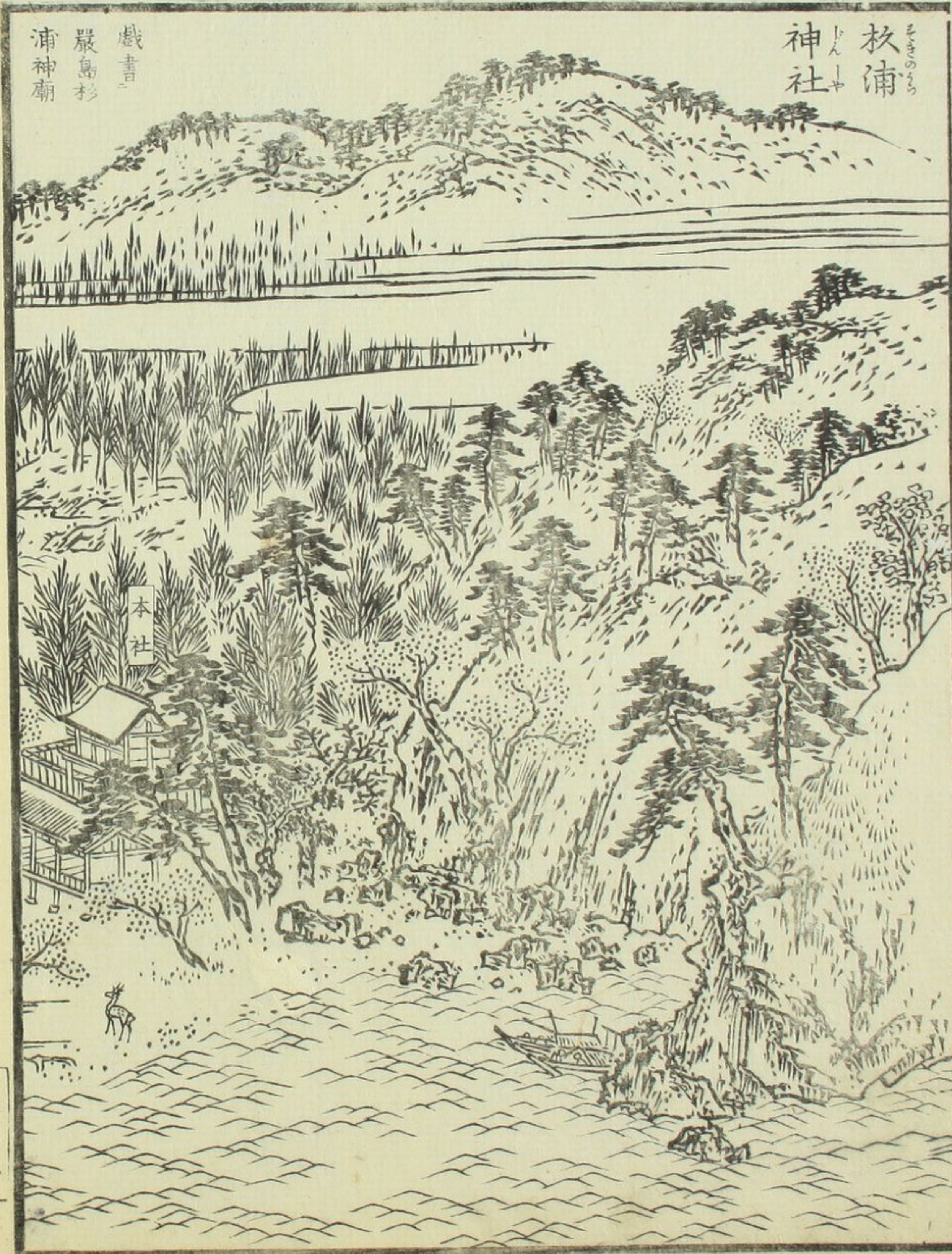


壁
石川大山
今茲癸酉。李
夏仲旬。伊都岐
島。祭祀之辰。擊
舟登所。僕僕問
津。獨有稚子。腰
鐮折薪。地曰秋
浦。廟言夷神。且
得且敬。如在如
裡。桐澹浪水。蕭
澗溪。嶺。枯松怪石。
淨。翠。邊。垠。暫。休
廟。又。步。海。濱。
倘。伴。徘徊。離。世
出。塵。食。網。魚。鮮。
愛。野。鹿。訓。遊。一
寮。鼓。地。吟。呻。滄。雲
一。點。江。湖。故。人。散
人。指。誰。姓。源。名。驛。



秋浦神社

戲書
巖島杉
浦神廟





包浦神社

七浦風烟隨棹移

神鴉飛處羽差

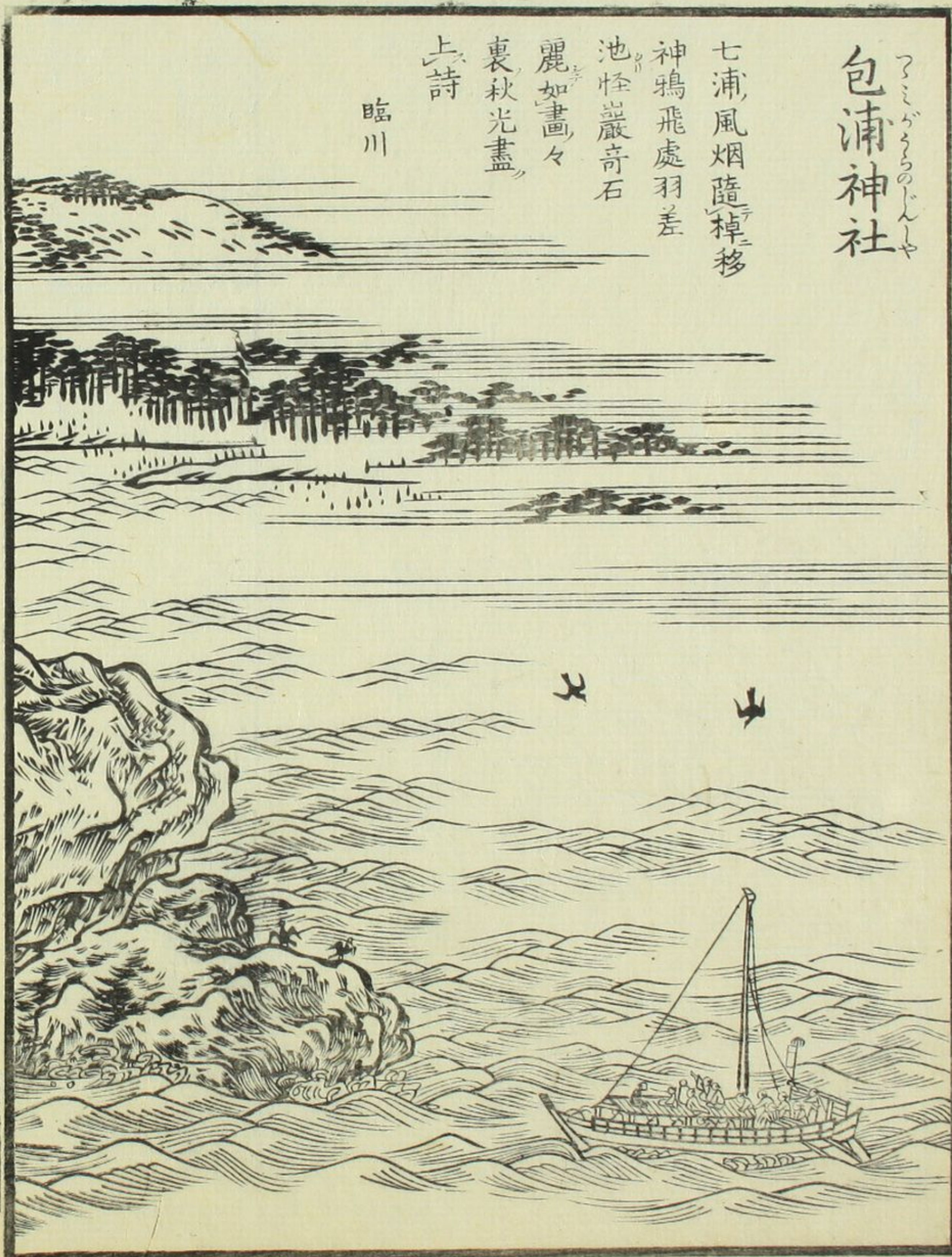
池怪巖奇石

麗如畫々

裏秋光盡

上詩

臨川



青海苔浦神社
牛王社同浦

祭神中筒男命島巡り
祭神猿田彦太神

うけひつ本ののみより母青海苔の浦の名に紀伊の松もろを 中納言持

陶全姜敗死所

青海苔の浦よりわく山より十三町をかり高安が承とらる地なる全姜
毛利氏の名に破れて多し道れ来り終は自教せん

陰徳太平記は曰く入道ハ肥太りたる人なれを行歩公は任せ次阿申
勞れ暫しとある處の石上ハ腰うちをて休まれ時中畠並依渡
ちや日も予小下りけ今日ハ此山中ハ紛惑て湯屋ハ一磯辺小槎の
浸ていたる夜ハ入れば本ハ全姜公を載申し山崎殿我等
鬼竟の水練までける腰小綱を付け更遊き更休てけ本を
漕ぎ阿基なる阿太多島ハ小黑髪りまで逃退き其辺の渾舟と
もに乗せやて防召へ歸るべく槎のりて天河へ入りつむを
ましとや阿を島までい何より易きりみていといひきき入さ

聞て佐渡勘解由が水練ハ吾兼て知る所なり吾もまぬ富田川ハ
幼少の頃多裁して海河ハ自由を得ること海神渾士も勝る
べし遊き渡り令生んとねもはげ面ハ力を不借阿基なる
島まで渡らんハ最やまきことなるべし熟子の槎を按ざるり
け度不意の戦ハ負しこと是吾戦の拙ハ阿もぞ乳主君を殺
せハ八逆眾小當島の大明神冥罰を加つらる所なり然る上ハ
迎も適れぬ此身の死まべき途を出海上などよて敵船小あ
ひ止くと討れをんこと一身の耻辱のそり先祖の面伏子孫乃
名折なりそのうハ防長を統の士卒三万人を帥て渡り一人も生
て歸る者なき形状ハ一入さ一人立ちつりて死たるん者の父
子兄弟小何の面目ありて面を對べきや只自害せんより外更ハ
思ひ設けたるり持たるれといれりき聞人感祿の涙を流



たらのまうらの
鷹巣浦
神社

陰く草て

ひなもまむ

まみ

とりの名の

あつた

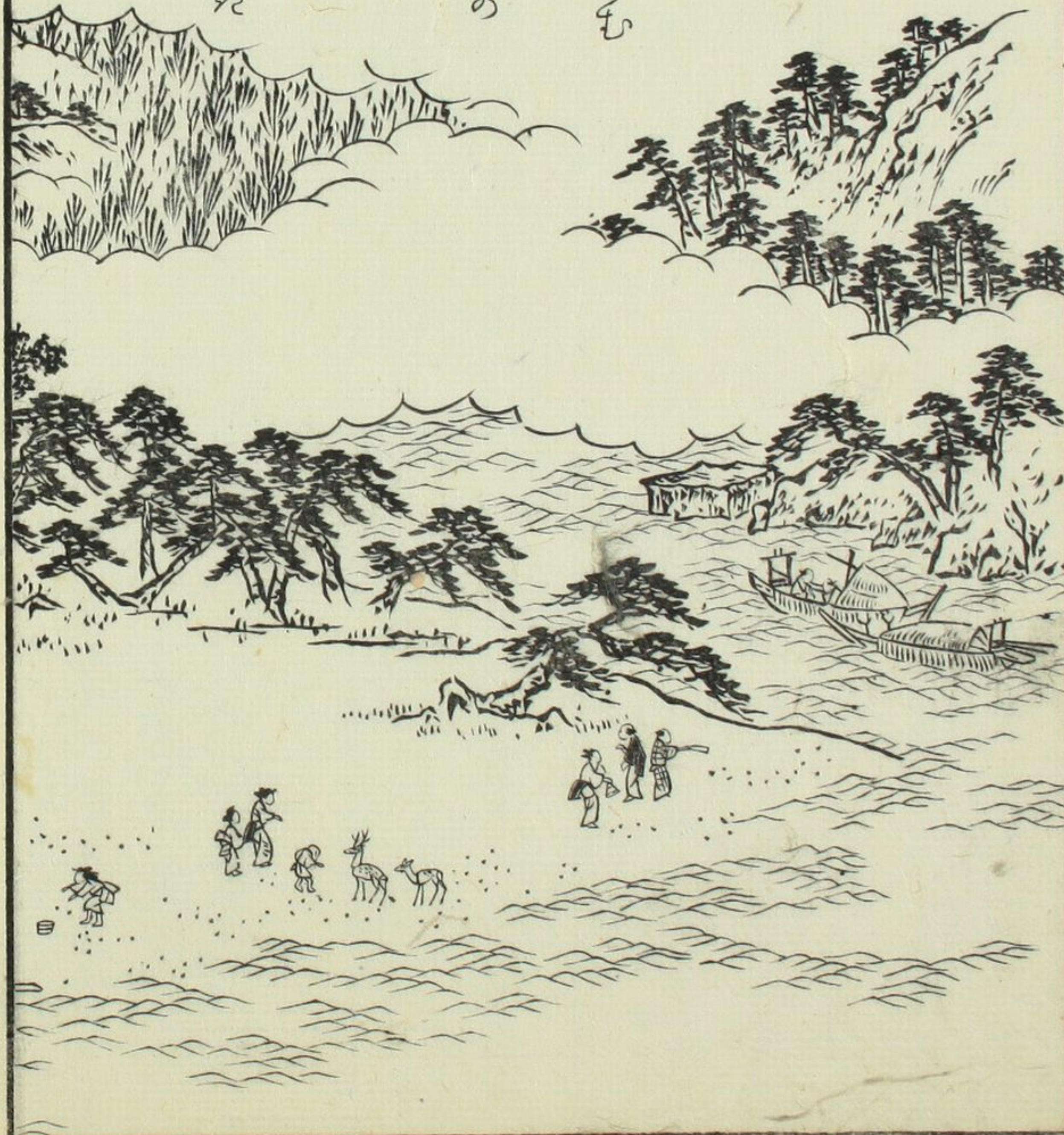
ま浦の

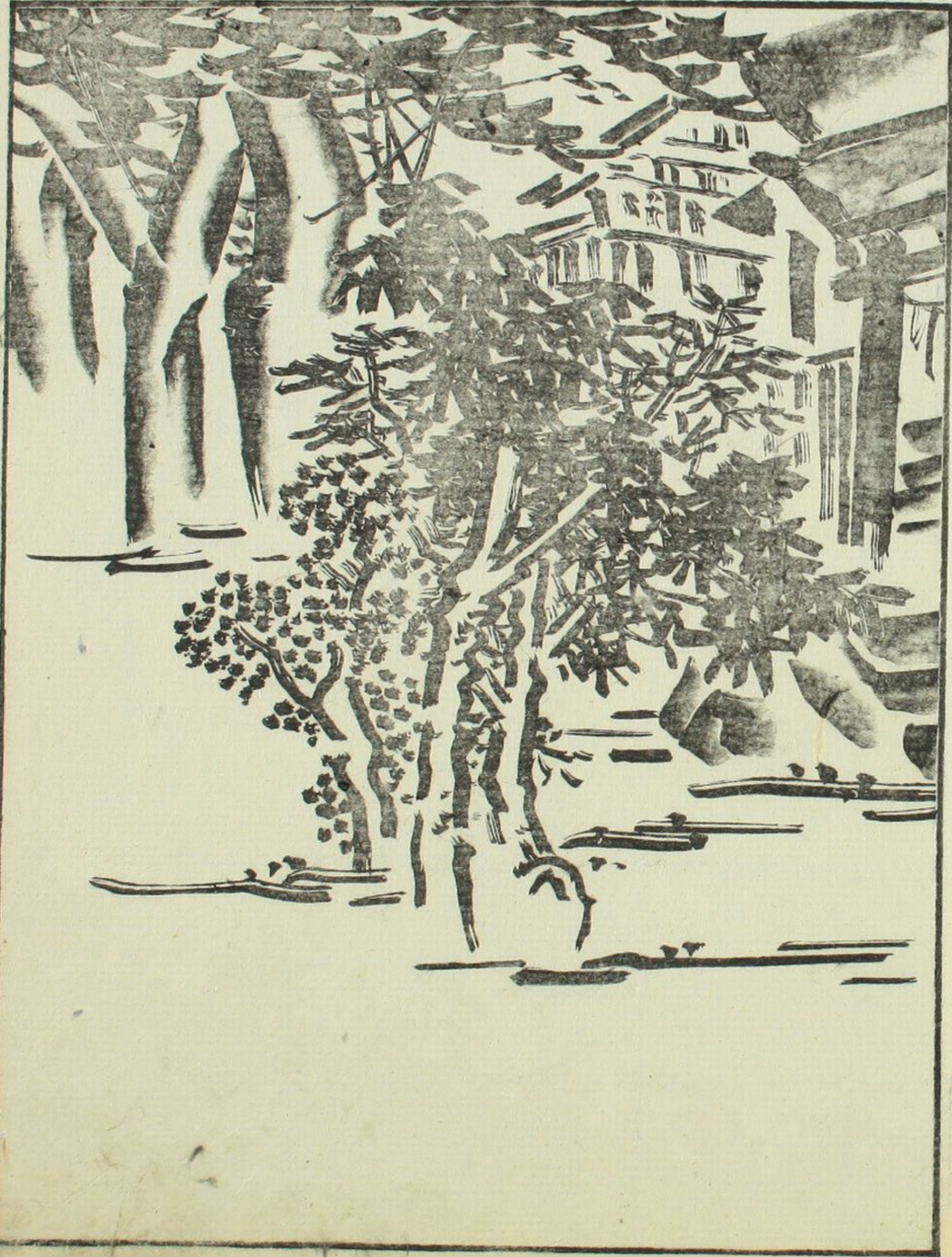
松を

こまのり

清水

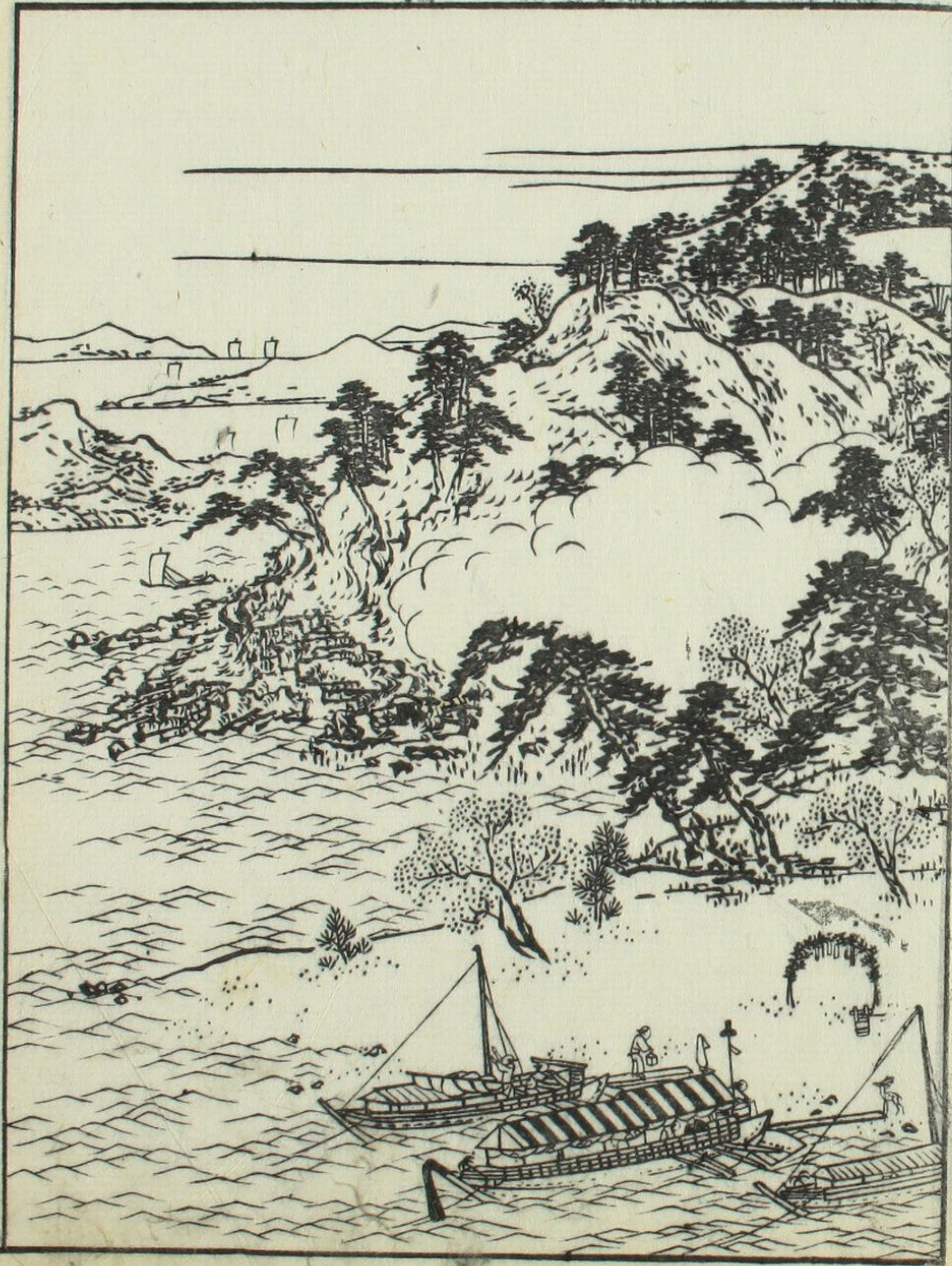
調え



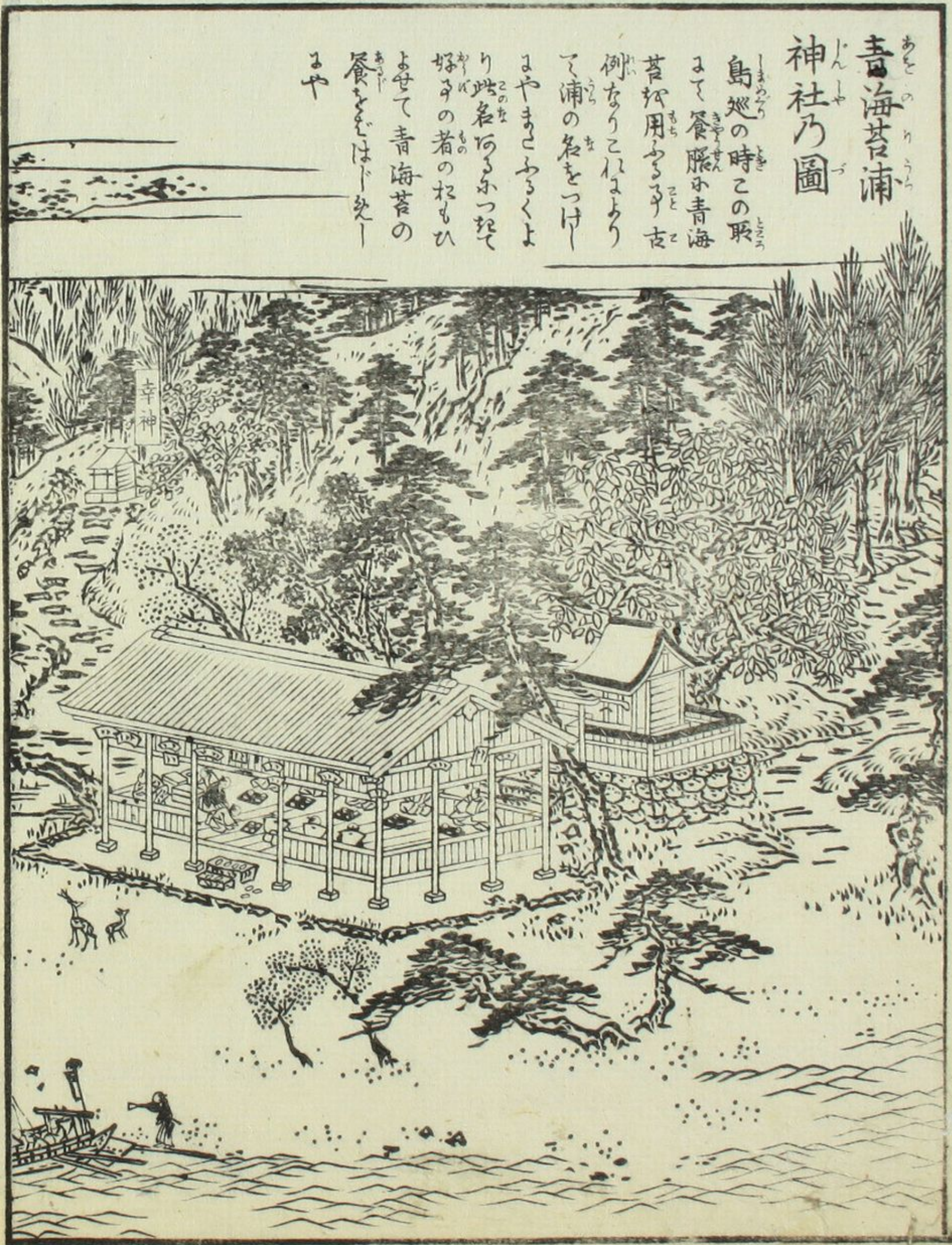


こし
かき
の
じん
や
腰
細
浦
神
社

善
戸
田



青海苔浦
 島巡の時この取
 まて 養藤小青海
 苔は用ゆる古
 例なりこはより
 て浦の名をつけ
 まやまこあくよ
 り此名あふつたて
 好子の者のねもひ
 よせて青海苔の
 養まをばり免
 りや



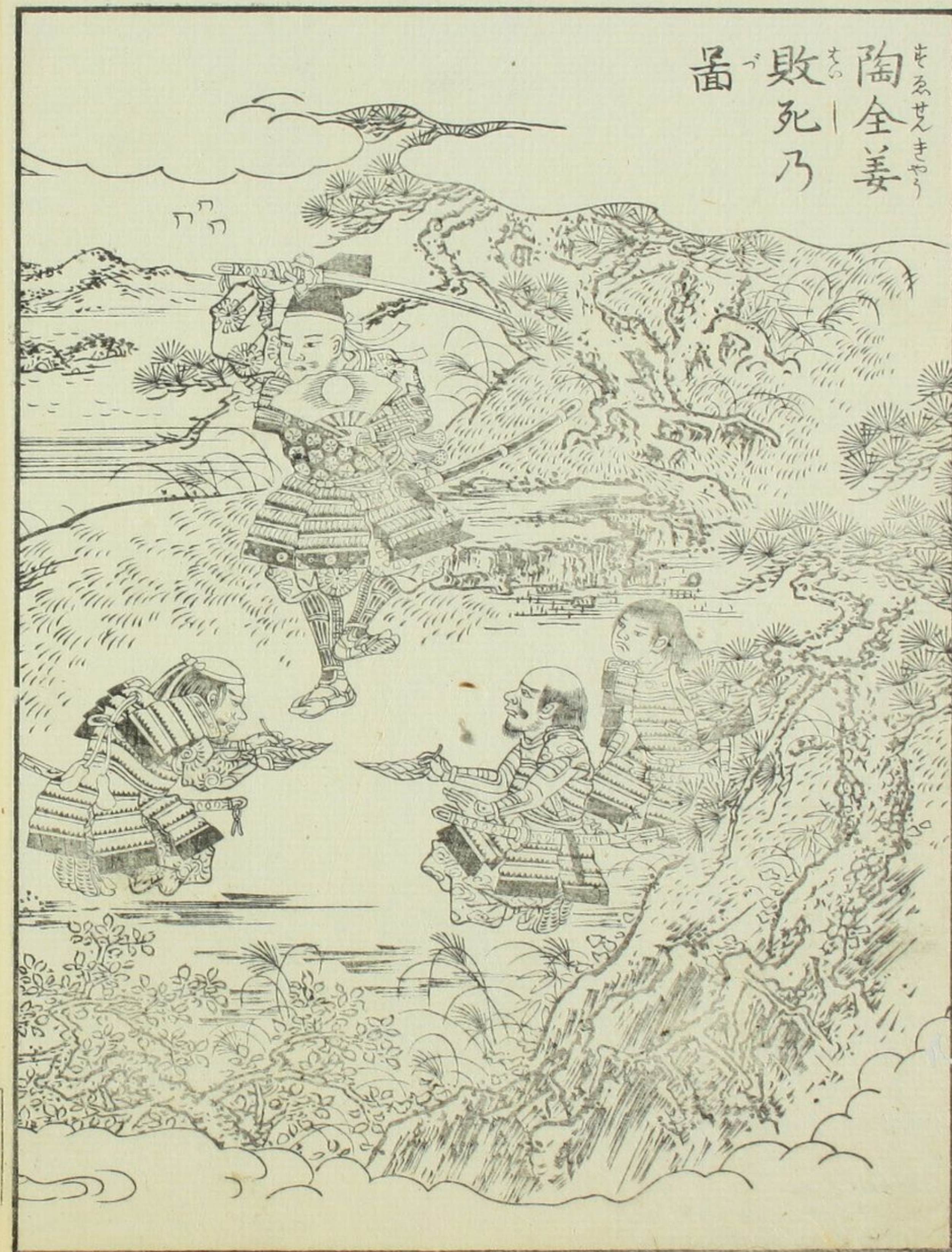
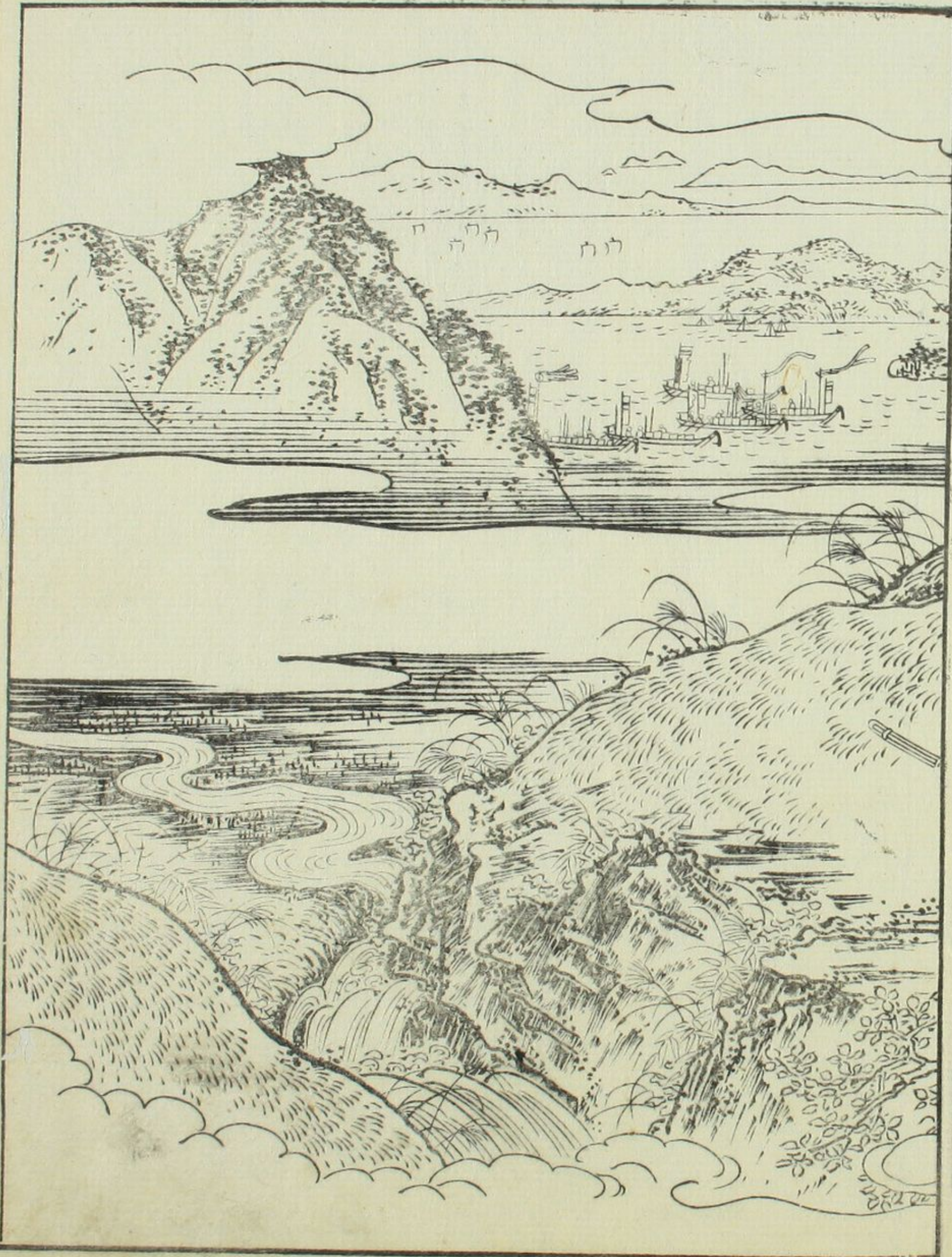
せり牟羅漢謝仲初が術を得まらば水面小笠を措き竹葉
小乗て江上をも済ぶ一英乃真王子喬が道を不学の松陰よ
不む麻雲野は翔る鶴は駕次多も何といはる故徳人中二
途小ろろろ次面く只潔く自害して中有九重の泉路までも供
奉の忠を建(き)と心の中いらに涼くくんとを足えまらるかくて
入る石上は苔を拂て座し乙若が頸は掛たりる袋より胡
餅を取おし自らも喰ひ山崎柿並木ももらつれらるがはて面
く腰は何までも付さるやまき水吞の持ざるや最後の杯もべきを
と有る礼とも不意を討まし合戦なれ誰一人とくかる用意
一たる者もなかりり其時民部少輔兼廣柏の落るるを拾ひ松の
葉を以て二三枚重ね平子の形は作り谷川の水を汲て酒と
号け莞尔と帯ていろは面く聞る(後漢の道丙の故人は遇

ごとく水を酌て酒となせば人々な酔こし飲得たりとかや是はそれといひ
れ久て一盃吞てまかなれ浮世の酔を醒まハ功德水と名けべきはま
ハ昨日の谷の流を汲て彭祖の菊の糸小なまをくふ代もと祈り
君ら数今いまも曹源一滴の水は比し子小掬し即身即佛を
一丸たまと願ふるれらなりはよと後みくれて立ちるがいで最後の
燕せんとしてさしはらまきつ強つしひらまきつ吞るるに山崎部解由はら
ハ一曲謡をんとて聲いと美しくて五衰減色の秋なれや落る木
の葉は盃飲酒の谷水のちるるもまな汲川水上の吾なる物をものれ
もふ時しもい今も我限ちうけまといと諷るまハ入道勅解由ハ親世宗接
相傳を得て乱舞の地は世の知る所ちうかろ折しも時節はあはれ
せら謡思ひ出しつるるも我常不庵を嗜するの深きを顕すものなり
胸裏小勇とりふ字の踏る故ちうと大小感し其後入道の盃を氏

部納名(一)とては、まじりて承けして頂戴し水たぶくと受たりけり
其時入道い下今の旗のそ途一さ一舞一とて腰の口を抜て
差鬘一青たさうに揚て難兵のそ小如らんよりいと思定て腰一
文字小撥切て其まに修羅道小如ちる此土とならぬ青海苔
山の無跡とひてたびとと舞納めれらまに満坐備も只今の舞ハ
常よりも幾くまはりて面白くせけ(魯陽が戈を執り入目を招
き一形勢を學び一舞とわかばきま多項莊が劍を抜て舞一そ
の心沛公小何り一勢ひ頂羽城下の破まに我力山を抜き氣世
被るむ於戲時利あつ威勢廢一勢と歌いまも唯目の前小
見る極るまけ(一中もも青野が原を青海苔山と引習させみひこる
巧るそ我かゝる折よに能思百出させ給け(一宗接が新宅の祝儀は信
濃なる浅るの嶽は立雲のと烟ををよ謡うけひ)とそ我奇特の發

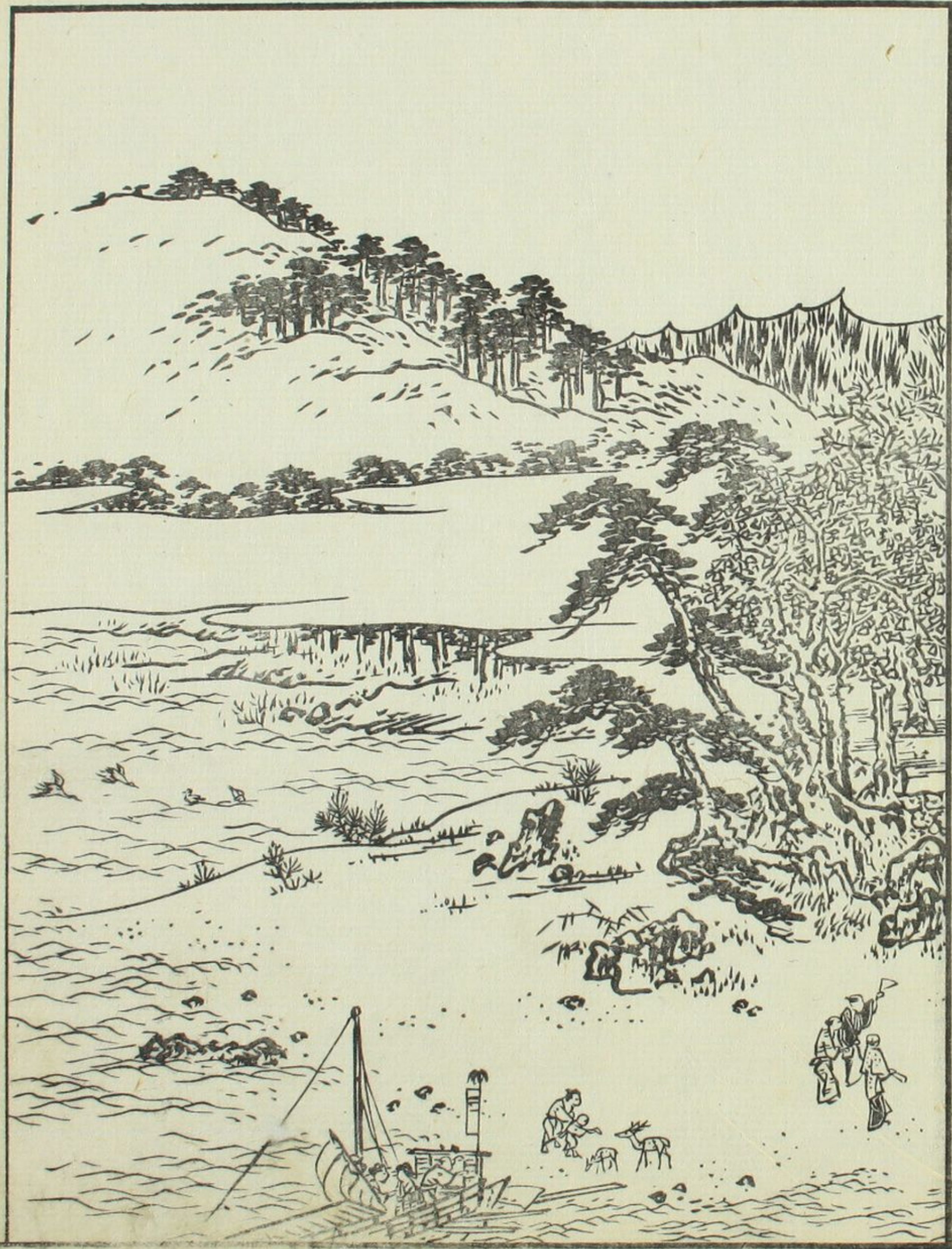
明小申候(一唯今の一字千金の佛作意もそ天地の勝劣よていと
一同は感稱せりはて金姜石上小座一辞世の歌よ
何を我みなまを恨んもとくもけ何るも定の身小
と涙をたりぬまに満坐感涙を流まかれはま多山崎勘解由隆方
柿並依流中房結
伊香賀氏部大浦隆正

莫論勝敗迹人我暫時情一物不生地山寒海水清
伊香賀氏部大浦隆正
おもひまやち年をけ(一山松の朽ぬる時を笑ふんとい
と思の志を吐られい入道面く飛舟舟の餘流を汲て珠は好子の達
者なれば心詞目頂は十倍して覺えり依渡者が人我情を故擲を
る意趣最後の善知識なりと甚感歎一はて金姜若楓とのふ服指



を弓矢の腰（袋）突立矢多（颯）と引回し曳やつと声きりけまき取直し
心奉れぐつと押立下（寸）と押下し腸活と出られ手を以て綱に出
さんとせらるる祈を伊香賀氏部少捕見ゆも遊ばしといひも不敵
太刀振上ると足（一）が首の前まで溢れたる民部たち入り入道の着
らねらうつる小社小首を包み杵々に隔て谷川の岸根に重りたる岩の下へ
押之免供は在る者共石を墨し木葉をうけてを隠し居るはて山崎
柿並兩人阿僧祇知までも断念朋友の盟ははらばど互に手取
を執り太刀を心ならず刺立て二人貫き合て死なればその外伝を
したる士に人も同じく刺ちがて伏せたり民部是をこそ何も剛なる
死極うな入道殿の剛なれを家子等ももて勇なりと感（一）
さて吾身は二三町許淡邊へ走り出立なかり獲りきやがてつらふび
押切て倒れ死せり民部がふるまひ勇なり義あり忠あり謀あり

りと感称せぬ無りけり其後陶入道の首元就父子に人実捨ありて
廿日市の黄龍山洞雲寺に納免石塔立置懇懇に孝養せしむる
関伽末 孫山の関伽水此處に流れ出つけあつたに護岐の浦
養父崎 林本生茂り産石時立て
養父崎神社 浪あらし七浦の外あり 祭神靈鳥 島巡の時處處にて
凡島巡の禊しらふ島中の七浦の神社を巡拜するとなりこれ三
神この島は降除まじりし湯座所の地を定免んとて浦を冠
めくらせたまひし故よりよねるやその式願主吉辰を擇ひ
前日より潔斎をなす當日の末明大官神前湯を立浴より船
に乗る祠官の船は四回切け賢本を立て先を進む願主は真槌
しげぬる船は幕など引勝水は十二人そを帆にけし海崎
乃松も乗申くちと諷ひ立て漕出次登の船は宿の宿より以下



山白濱神社

とちかり子

いしつち

くまの

久しき

ちど

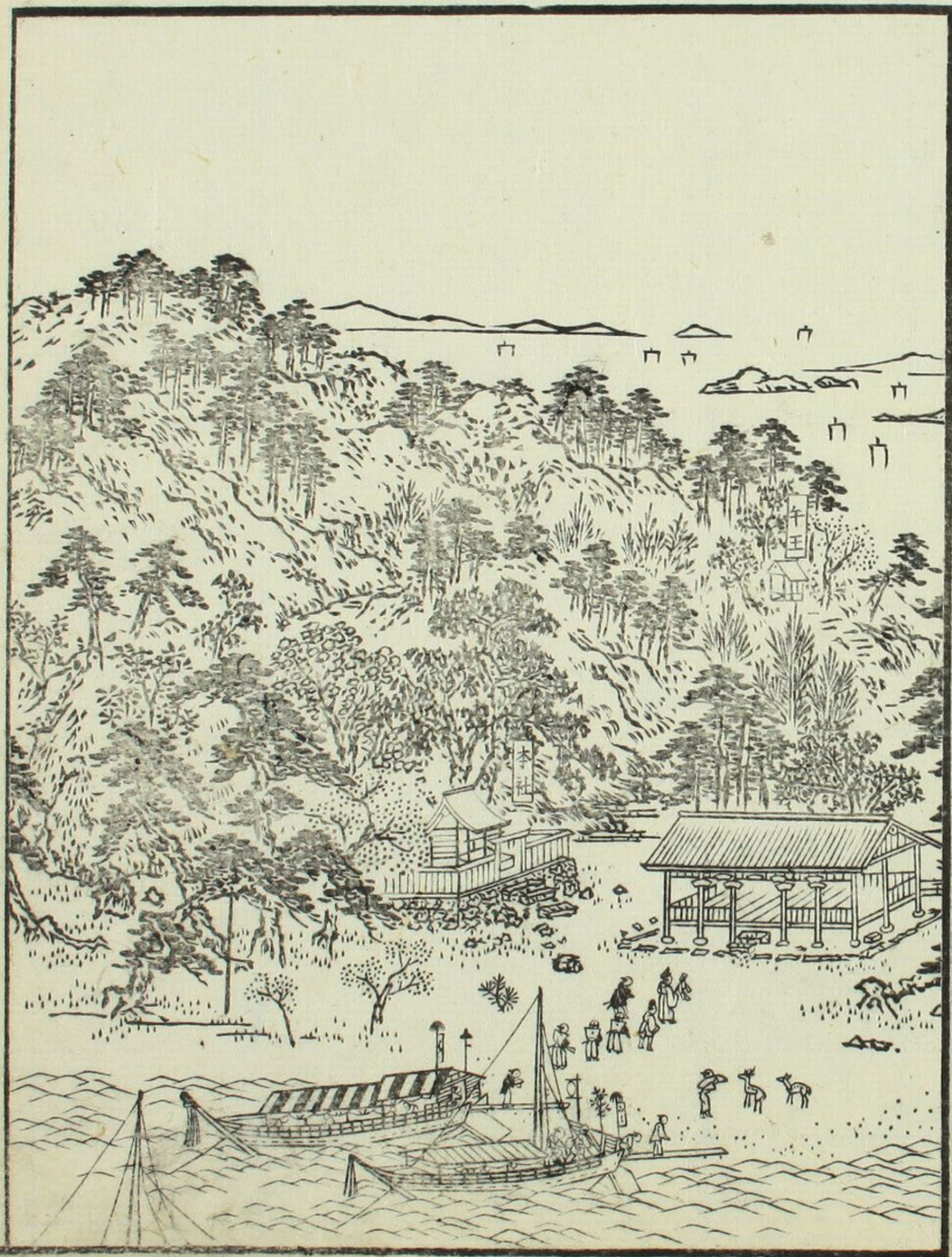
しんき

松うげ

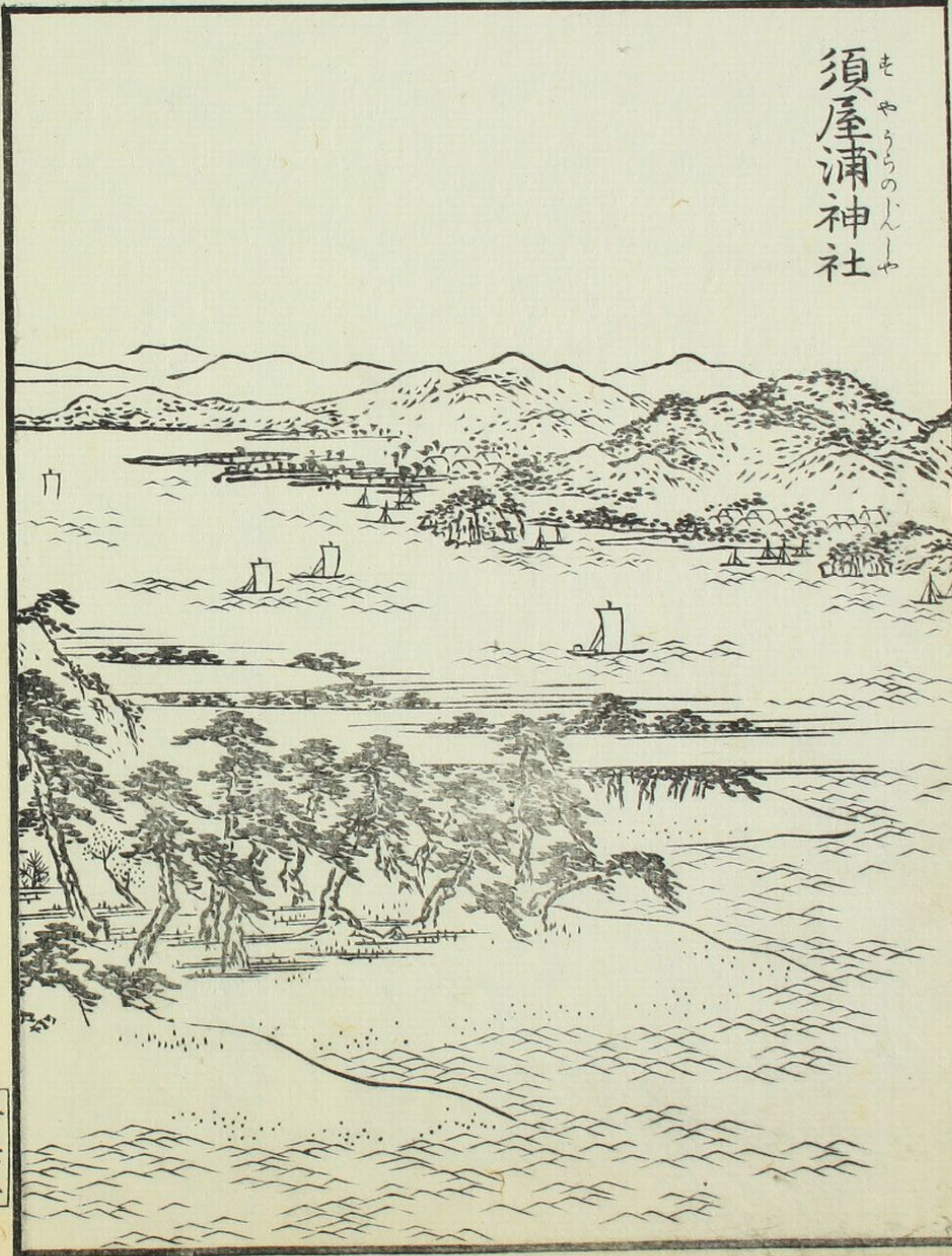
村田
春門

乗わり都合船三艘伊山を右にまわし廻りまづ枚の浦に著て各修
禊し社頭小拝調を祠宮社前小樂を奏し退出のと紀より
りて拜殿の儀は茅の脩をたてくりて夜をな次以下浦くとの
式異なることなり但枚の浦にて別朝餉の式ありて膳部質朴
なりそはより預て船を出し鷹巢腰細の浦を過ぎ青海苔の浦
小いもけ處まで午飯を調ふ飯上小青海苔を粉よそかくること
例なりはてその式をばつてまこ舟を漕出し養父崎小つこの地
洲濱もなく岩石かさなりてうちよはる波いと清く松の木はち
朱の玉垣をえさせたまふ祠宮ふなはご小ちち出築を海上より
へ鳥向楽を奏をねむちまちに靈鳥一雙嶺よりとひ来り祠
官の船に移り波よりくる築を雄鳥まづかりてわぐ次は雄鳥
また下りてわぐ其時前後の船艇を叩き歡の声を發してどよ

免くこと暫しありもたまにわがかりてまご雄鳥来りてわぐ凡て
三度大く島巡の多き時ハ一日は二艘より十艘にわよること何
りといとも次第なかくの如し但船中不淨汚穢阿れハ靈鳥
出ることありもはるも阿まば祠宮船中を點檢し聊うまて
も障りある人をバミな船よりわろし跡の濱に残し其後船中を
修禊し新たに築をうふれごとなく阿らるるそれより山白濱を以
きて洲屋の浦より宿屋餉餅の餐をな次いなる所由とい
ふことをし其所を過て伊床の浦より各まご修禊し石上の
拜殿に蹲踞を祠宮祝詞をよみ茅の輪を納免大元の浦に
漕着け各船より下り神拜をなして後宴の席を異くはて大
宮容神宮小報賽の神樂を奉る以上島巡の梗概なりま多浦
巡といふも阿りこれハはせる潔斎なりもせ次は山水道遙のた

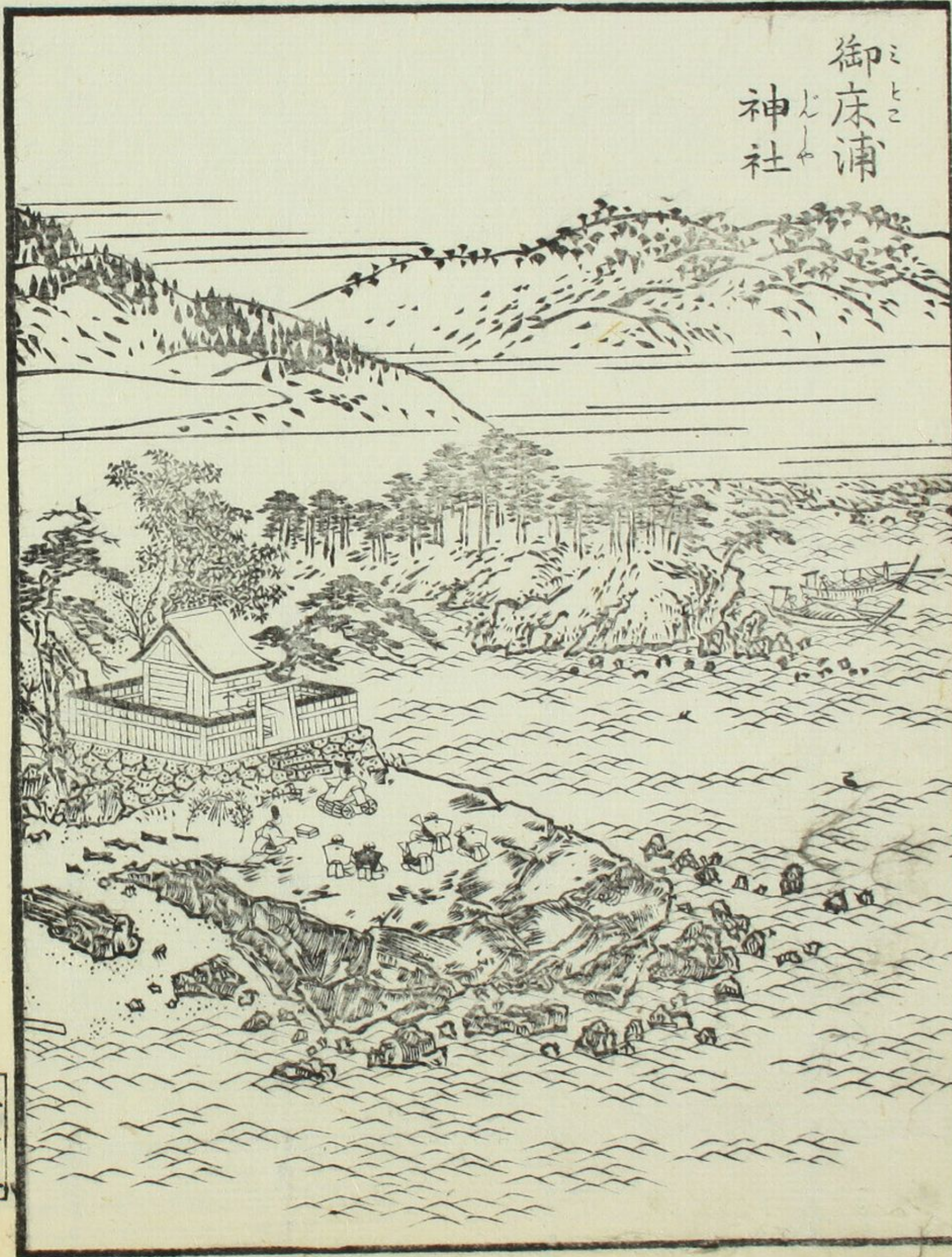


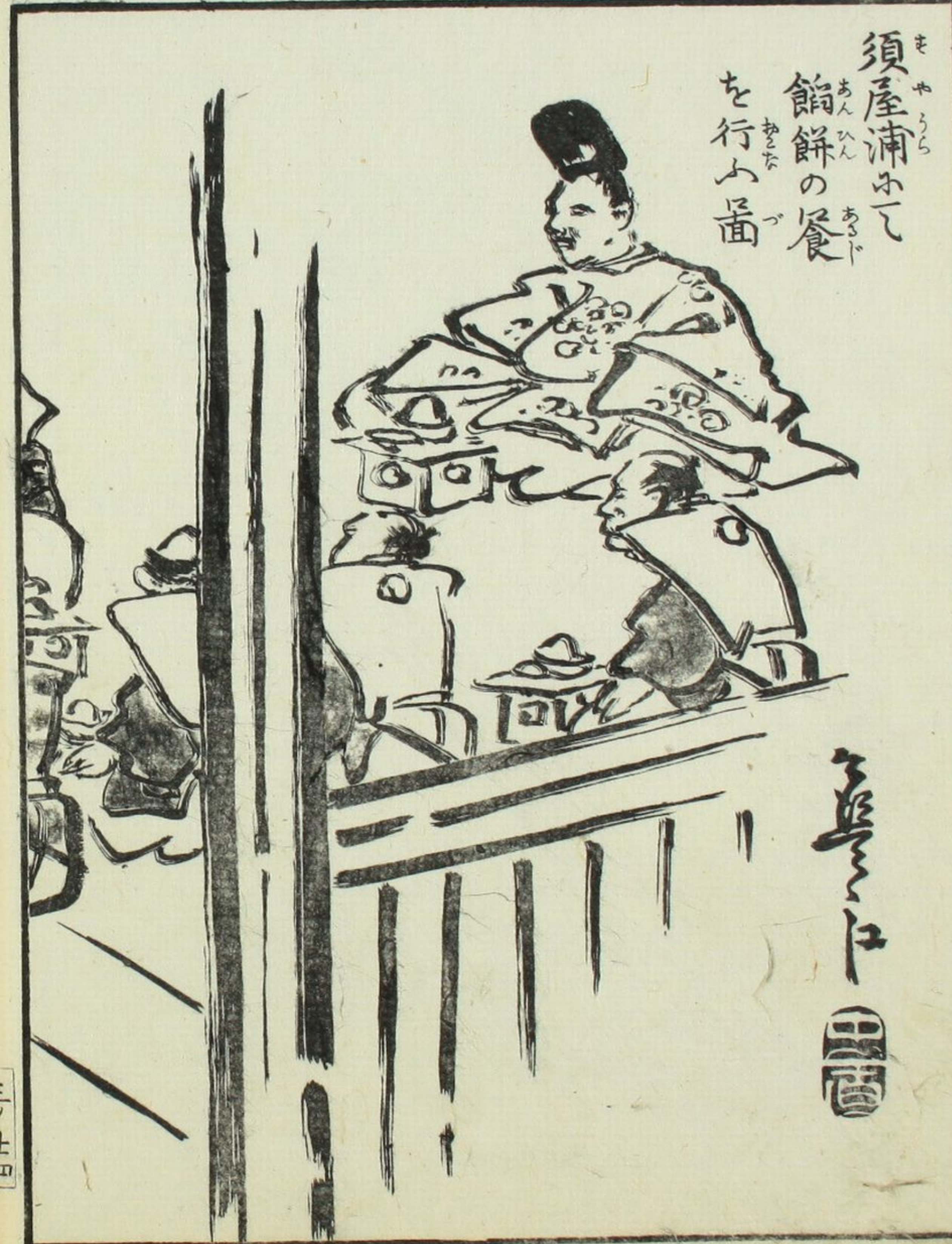
須屋浦神社
きやうらのじんしゃ





御床浦
神社





須屋浦 まやうら ひて
 餡餅の餐 あんひん あじト
 を行ふ おこな 番 づ

須屋浦
 田

免ちり

霊鳥のこはの巻大頭大
明神の件より

島免ちりのこはをよめる

ちり浦の島めりつ次舟の中はもの音はる後林やきん 中絶言持を

いつてもみる来られいつまえらる浦回を面らげよて 似也

山白濱 海濱三町この處は菓は金石と

山白濱神社 祭神表津少童命 島巡才五の社

かこな名さうこうぬ山らの濱をふりた神の島を居る 中絶言持豊

葦籠崎 同浦の鼻 逆小あり

早咲櫻 同所より咲月未既花開て 香色ことよ愛はべ

桃木浦 淡二町入は あり

棟木浦 上よお あり

江浦 上よお あり

下り松浦 淡一町半入はあつ浦は鳥帽子 岩よりあつ形似たる由を名と次

阿多太島 同所の仲ふあり山よ 明神の祠を置り

そ行りよ田東のつなは一おたるやまの傍といつてまのあそ

ひ二十町をかりつてたる中よ小はのささくけよん

るかひとつゆるこれあん小集ぶまといふちるべーこの島のちり

りといつてことざらふあさ

一まぢふいさささかんたがたぬあまはあくと名をわひん 源貞世

そのこなみよあむ一あつちりまはらうのせとざやな

長浦 海濱三 町は

須屋浦 或ハ海屋は伝 海屋は五町

須屋浦神社 祭神表筒男命 島巡才六の社

牛王社 日浦小 あり 祭神猿田彦大神



須登清水 須登浦より流き出る洞水なり 来往の楫船
これを汲みて海路の用水と飲

浦をり 須登の潮をたまたまにんふたはをたひをる年 中絶言持を

新贄浦 漢一 町半

猪子坂

洗床浦

洗床浦神社 建神殿石上

祭神市杵島姫命 島巡守七

相傳つゝいとく此浦の本社の神天降ふせたまひ一時の真床即ち

いそちとちりし祈をうとぞ

あふけを布天うらましくその如くの洗床のいそちとちりし祈をうとぞかけ 中絶言持を

牛王社

日浦より此社のちりしに 島瀬子岩より

祭神猿田彦大神

大川浦

漢一

大江浦

入江あり 鷺は岩とくの上は浦より 形似るをもて名と次

貝売塚

大江の浦の漢よりあり十三町をかりの山間は二丈余の窟あり其下貝売塚なり 弘治年

内侍岩

同内侍より傳へり徳大寺大將實定はいまだ大納言たりし時岩島へ下向ありて 高の内侍有子といふを愛したまひしは 帰京の時け處はたより別を然歎せし

源平盛衰記曰内侍の中小有子といふ者あり十六七もやちりし年少

く幼稚て常もまゐり次をりし 見来りるが希代の琵琶の上をちり

常は仰ぐまゝり或時有子とく糸で唯一人洗前ふさやひるを己
が身はけ玉の者くと洗尋ありまゝども顔うちありて洗返りもま
うさ次愧くけちる有極いと由ありて洗説らまは實定思召入
たり洗氣色よて墨紙は洗手次さみありて有子が前へなげさせたま

へる

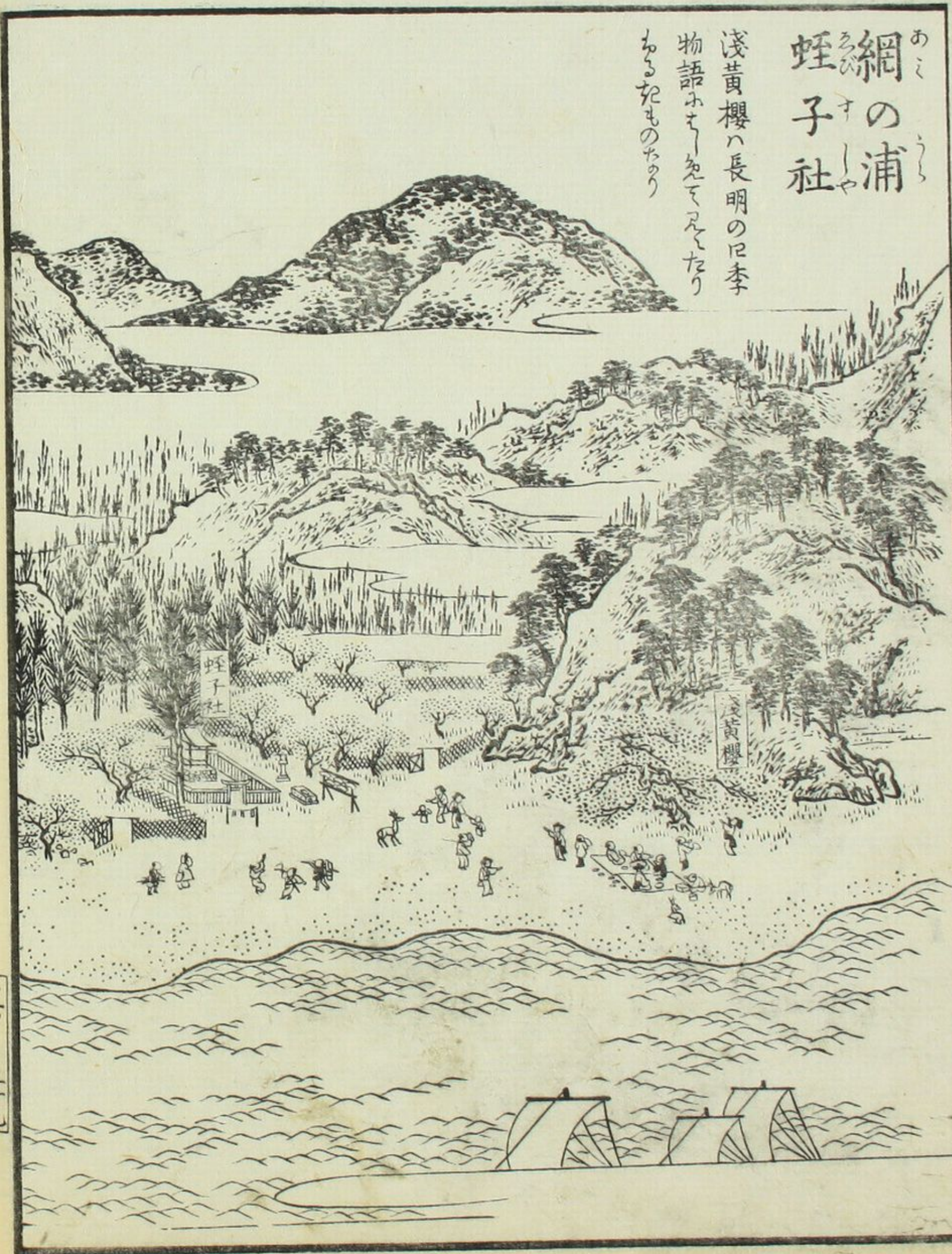
山やまのそにちねて出いでんよほの月つきめらうきき拵しなきき拵しなきき

有あ子このま内ない侍じのこのま次つぎさみを給たまへ堪たむ思おもひしめさけししねささきき侍じ前ぜん
をばたちぬ実ま定じのたい尋よねの情なさけ思おもひるるを内ない侍じのびびごとく
ぞれもひししけりはても七日にちさぬまの都みやこへううりりたたまふ内ない侍じど
も侍じ送おくままささるる有あ子このまののははくくぬぬたたままううななししねね上うりりたたままひひちちんん後のちの
よよおおままてもも争いららふふ兄あ奉たへへんととて衣き引ひくくづづきてて卧ふささりり内ない侍じともも一いち夜や
の泊とまりまで侍じ供とも中ちゆうて其その夜よの珠たま名な残ざんを惜をししててままつつ明あぬぬままの
暇ひま中ちゆうるるを實ま定じ宣のたまひひるるの餘あま波なみの尋よ常じょうななううととひひななぢぢこれこれの理ことわりは
も次つぎきたり何なにうういいくくかかささるる都みやこまででねねららううつつけけるるままももととお
もふ見み森もりももいいつついととねねおおををてて阿あるる勢せい思おもひひののんんももととああききををとと作つくららねねら
ままババ内ない侍じどももささぬぬたたまま思おもひひささききななららううににくくここままくとと宣のたまひひるるま
の都みやこまでと送おくり奉たへへららりり 中ちゆう畧りやく 儲たくらも有あ子このまの内ない侍じの徳とく大だい寺じの何なにとな

き言ことの葉はを得えて思おもひひく
ののりり加かななららずずききままああららばば浮う世よははつつききななくく阿あままいいにに替かへへししてて侍じ思おもひひの
たたききとと母はは阿あままのの屋やにに沈しずままななばばややとと思おもつつ船ふね舟ふねはは便べん船ふねとと阿あるる
！ひと人のひとここひひととにに都みやこちちららききとと後のちままてて鬼おにもも角かくももななんんとと波なみののううはは
舟ふね漂たひひるるせせ免めんててののりりとと哀あはれれままなりり船ふねの中ちゆうにに願ねがひひのの琵琶ひのの曲きょくをを
弾ひくく調てう弾たん救きう曲きょくををつつせせばば聲こゑ松まつのの風かぜやや加かよよふふんんにに弦しん緩くわん急きゆうよよか
きき乱らんせせばば音ね波なみのの音ねもも紛まひひりりるるのの必かならず天てん澤ざく陽やう江かうのの口くちはは流ながされてて
舟ふねの中ちゆうにに琵琶ひをを弾たんむむるる音ねををたたけけをを銚しやうとと然しかととてて京みやこ都とののここ名な阿あ
りり故ゆゑ心こゝろののここひひととににそのその人ひとをを尋たねねままりり我われのの長ちやう安あんのの娼しやう家かのの女によなりり十
三じゆうよよととてて琵琶ひをを学まびび得えてて名なのの教きやう坊ぼう亦また一いち部ぶははひひりりとともも顔かほ
色いろ朝あ暮く小こねねととりりてて老らう大だいよよととてて商あま人びとのの婦つまととななりり夫ととのの利りをを重かち
んんととてて他たははゆゆけけばば我われのの獨ひとりむむななししきき船ふねをを守まもりり波なみののううはは流ながふふととの



醉妓
 鳥山輔寛
 酒豪自喚女青蓮
 日日倍歡公子筵
 春醉有時禁不得
 琵琶當枕卧花前



網の浦
 蛭子社
 浅黄櫻ハ長明の四季
 物語ふちをてんたり
 ちたものちり

ひたがぐ琵琶を抱て面をはくくく人古も思ひ出れり哀
またり有子終は摂津国住吉の湊の沖まで船は立出つ海上
るかま足波し

とかなや浪の下はもいり骨一舟の都の人や多連

とうち詠て一のびやる念佛やて海中一ぞくく舟の中者
ども阿まやくと騒ぎ礼どもまもみえはりちかちかこの
得陽の老女の色衰て商人は随て舟を守このいつまの有子
の年若くして實定をこひて水まどくくくいつく都は
披露阿りりまばいな人あはれとおもひり見馴し肉付りな徳
大寺の先大將はる井不便はわがく先

室淡 海淡
鵜泊 鵜泊

踏鞴瀉 海淡二丁余往昔平宗盛弥山奇附の供鐘を以て慶して鑄しと云一名の漢ともいふ
この浦は鬼岩大黒岩概石といふ三つの名石ありて形の似る故に名と云

江浦 海淡
一丁

綱浦 海淡一町半極多しけ浦
より大元(か)ふ路あり

蛭子社 月下

淡慈櫻 日向より白花水色を帯たり
まことに奇本あり

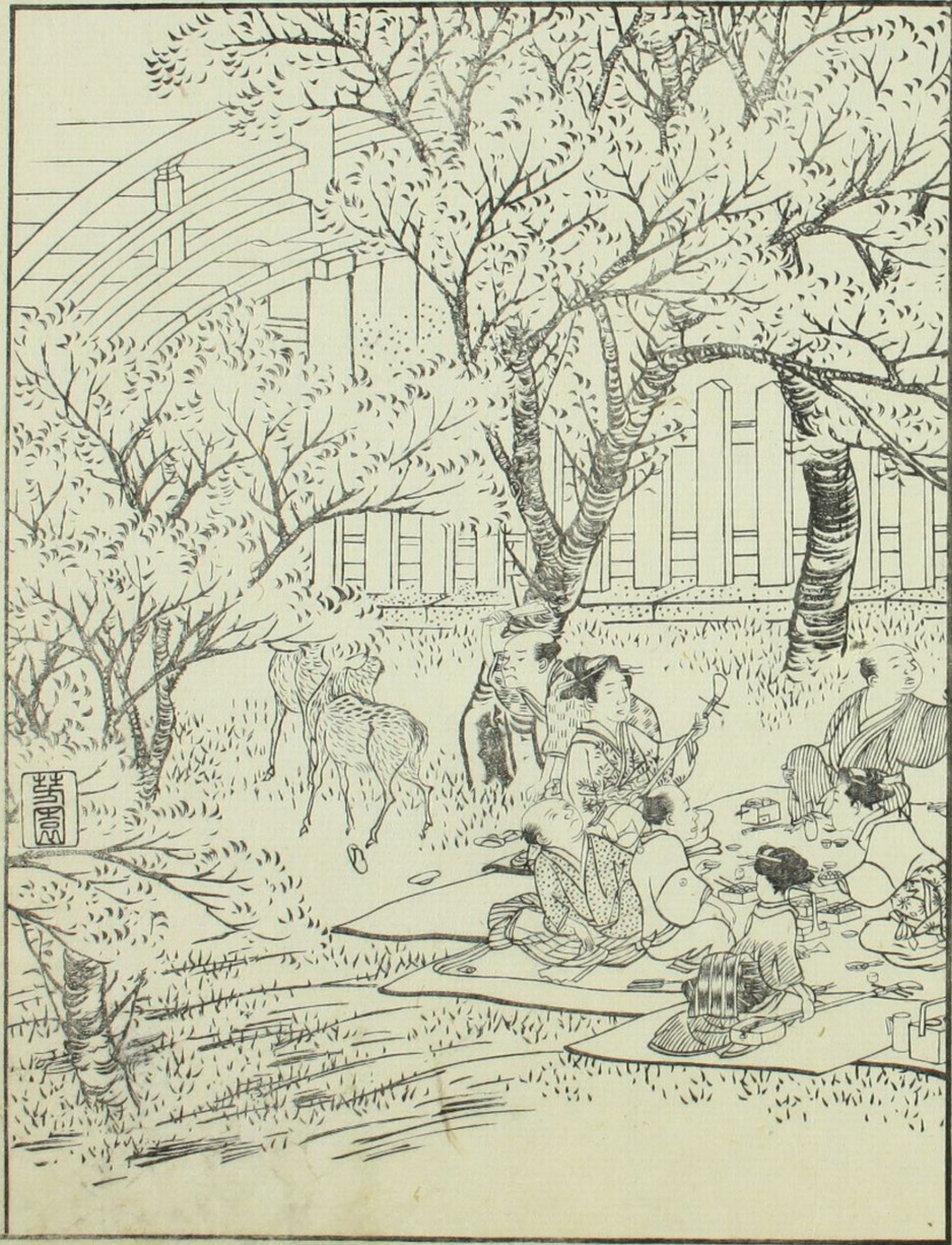
以上島巡の次第より記をとら後なり以下ハ大宮のうら後
のうらより起りて大元南町西町瀧町などにさし

預坊 宝庫の上の山形林あり社
僧なり其基未詳 本尊不動 御長五寸一分弘法大師の作○この余權本坊大衆
坊正覚坊等の社僧寺あり今廢てな

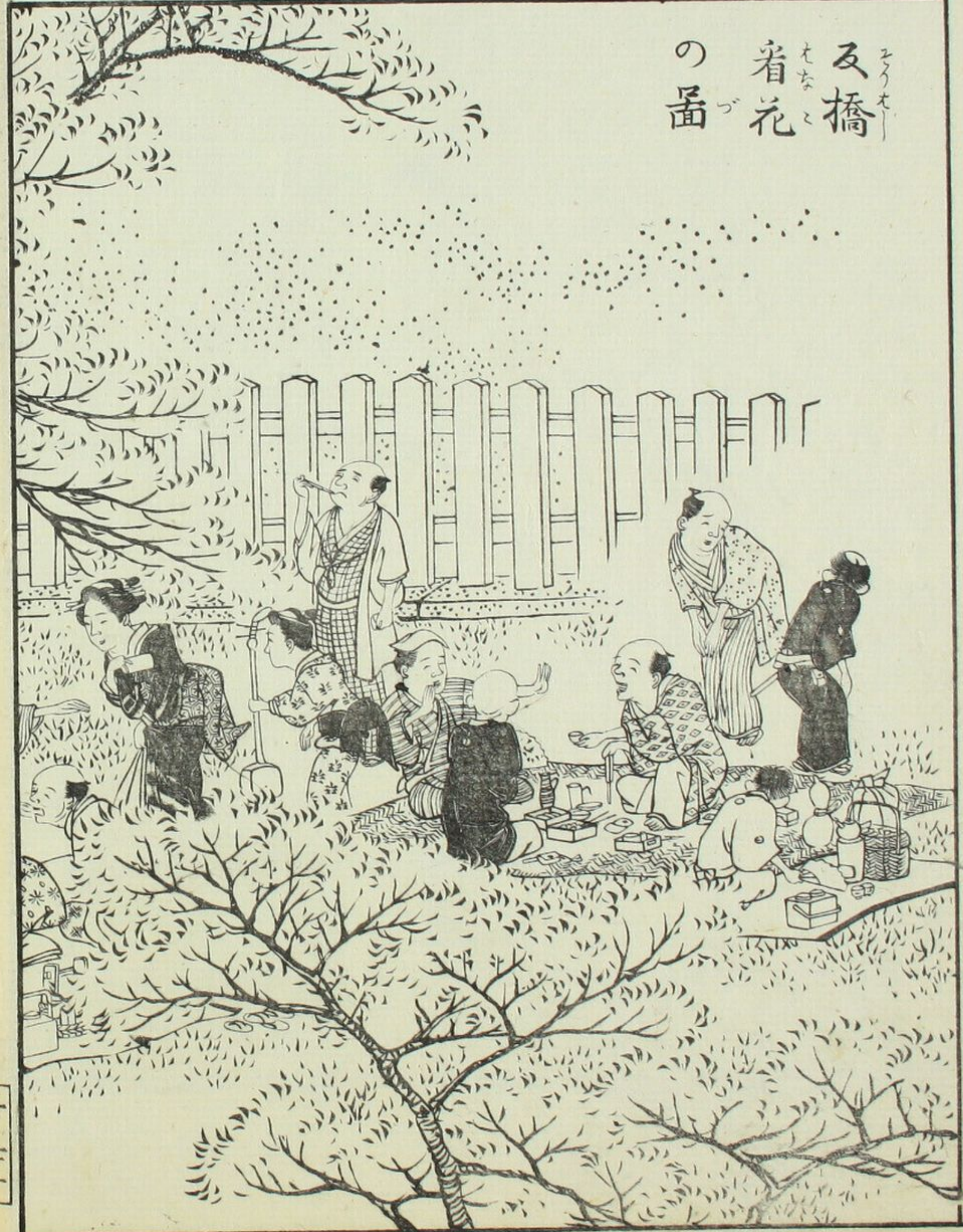
宝泉院 南町より南照山松壽寺と
号次京師仁和寺は屬次 本尊十二面觀音 御長一尺六寸 昭士不動毘沙門各
弘法大師の作

長一尺三寸 作詳なり

龜居山大願寺 大西町より放光院と号次京師暖峨大覺寺未泐なり古文書小
本願寺とあり今も本願寺と稱せらるこの謂なり



そらと
及橋
をな
看花
の
畠



本尊藥師如來 座像法長一尺五寸 昭士不動 座像法長一尺五寸 毘沙門天 座像御長一尺五寸

護摩堂 境内より奉尊如意輪觀音 鎮守住吉大明神社 境内より元龜二年吉田兼右に下向の時

老松 庭前より幹の圍に五丈高き五丈余老鱗數百葉の所なり

當寺の兵基年歴久遠より考ふべし次今ハ三十一世の祖了海上人を

以て中興の闢祖とせり 了海八建仁 世々大宮修理の掌として一島乃

巨刺なりき庭より松風颯々として迷暗の爰をねとるう一前より

波瀾渺々として罫塵の心を洗ふ実ハ清函深窓の古梵史なり

什寶

弘法大師自作尊像 座像法長一尺五分 弁財天拾六神像 弘法大師相州江の島に於て一萬座乃

護摩修法の記其灰を以て佛像を修るより裏書ハ 五大尊一幅 大師の不動尊

一幅日 弥陀名号日 八景野立屏風 尊海上人大經を得んが爲に後轉の時諸佛を携へてこれといふ那

其宿番と宝物 の巻に載せたり 古法眼画屏風 雅樂助画屏風 雪舟蓮画 龜居

山記 寛文の頃の當職以空大僧正時の宸翰なり院主の外ごく見るとを禁は

此余鎌倉のころ將軍家北條家などよりの書翰等數多阿れども煩ハ

一々まじり

大藏坊 大願寺のうらより日寺此末院

泉光院 中西町よりこれ大願寺の

大元浦 本社西南より或竹原溪ともいふこの浦に牛石と名をとり形似る故に名と次

この色泉石函邃の地なりまご大本の櫻散株阿りて妖艶たる花盛

ふ冬花下子遊宴松催して春を惜むの事少く次う前溪ふ冬

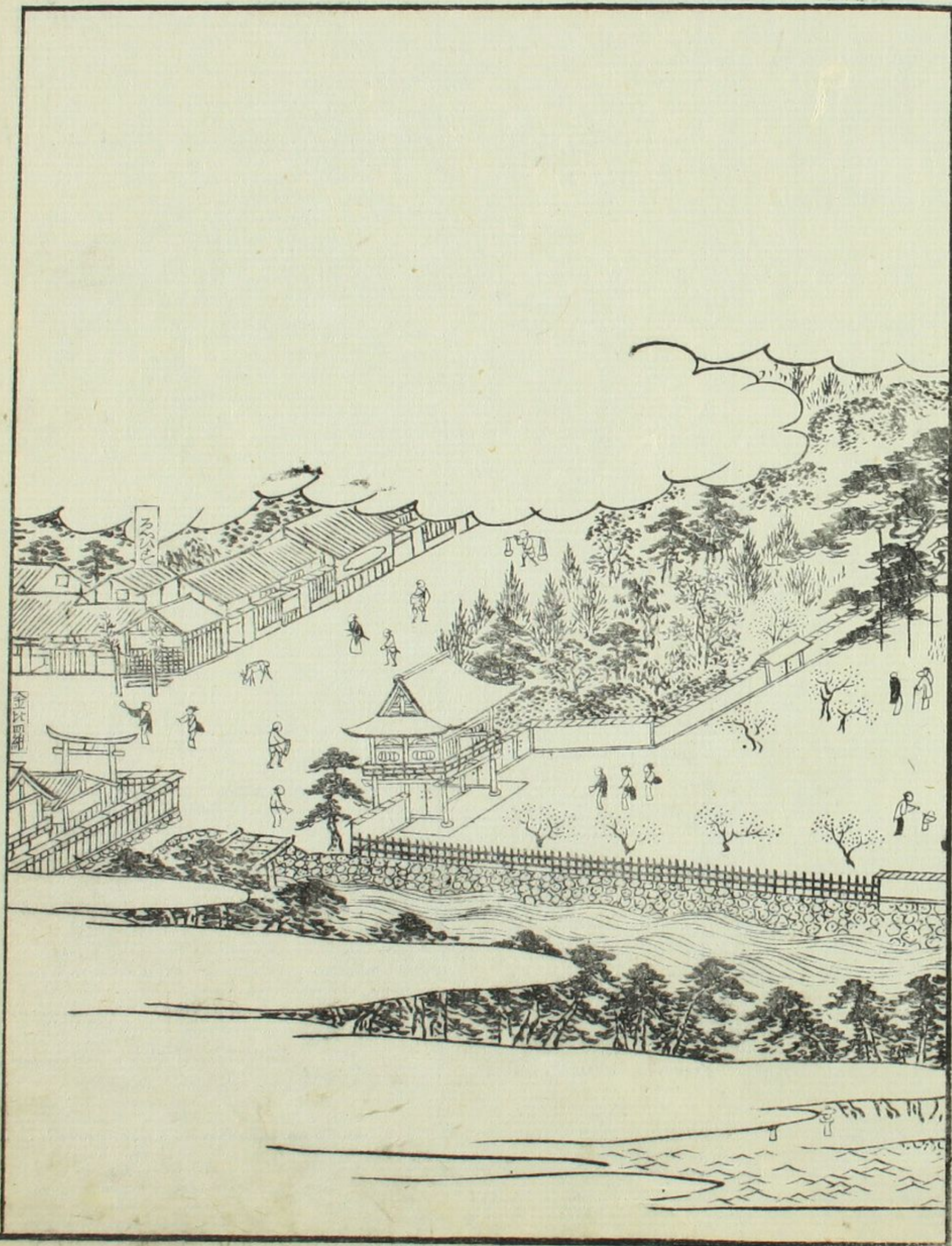
麩條魚を産むその味他境より異なり

大元社 日新より 祭神國常立尊 大山祇神 合殿佐伯鞞職

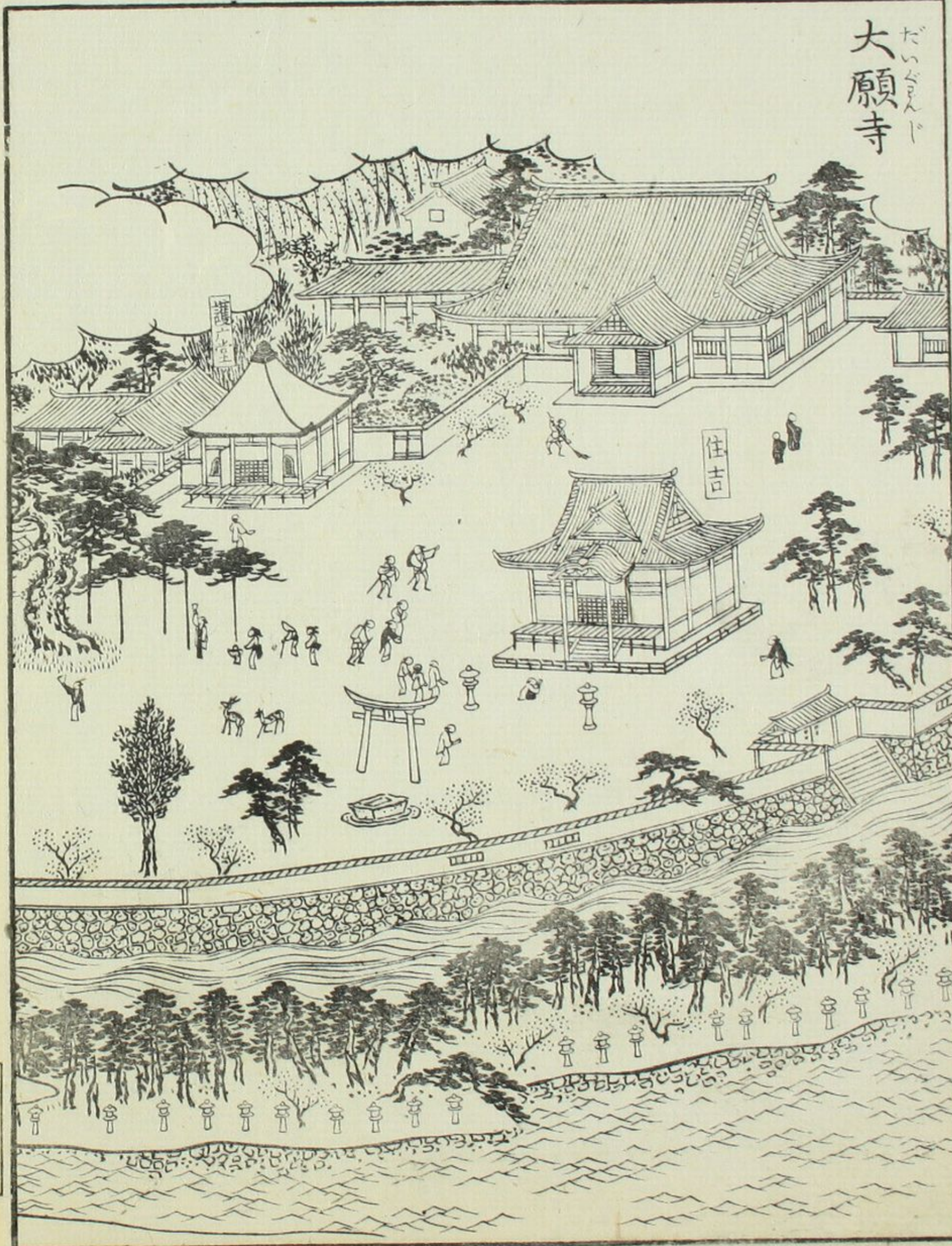
末社

大國主神

八幡宮

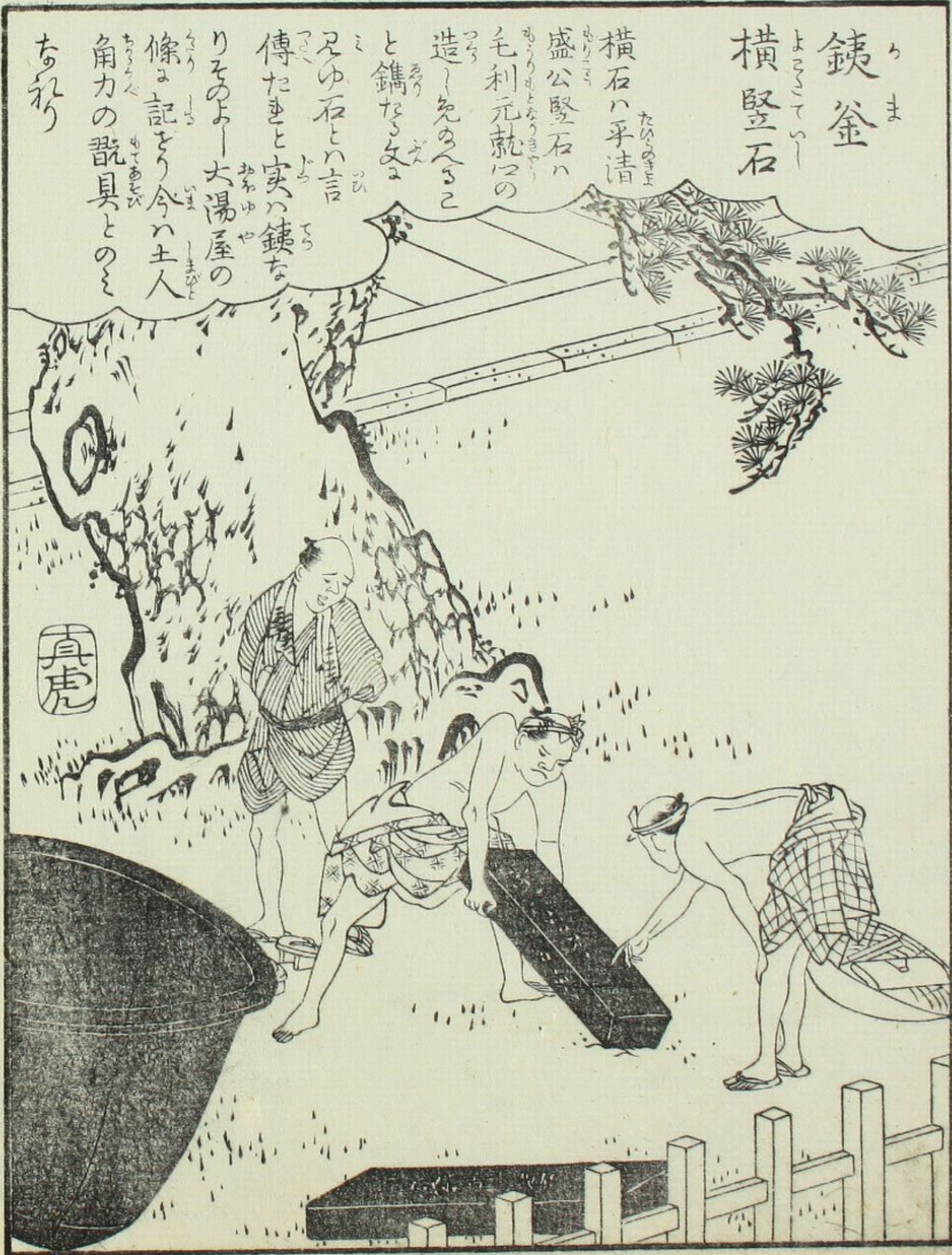


大願寺 だいがんじ



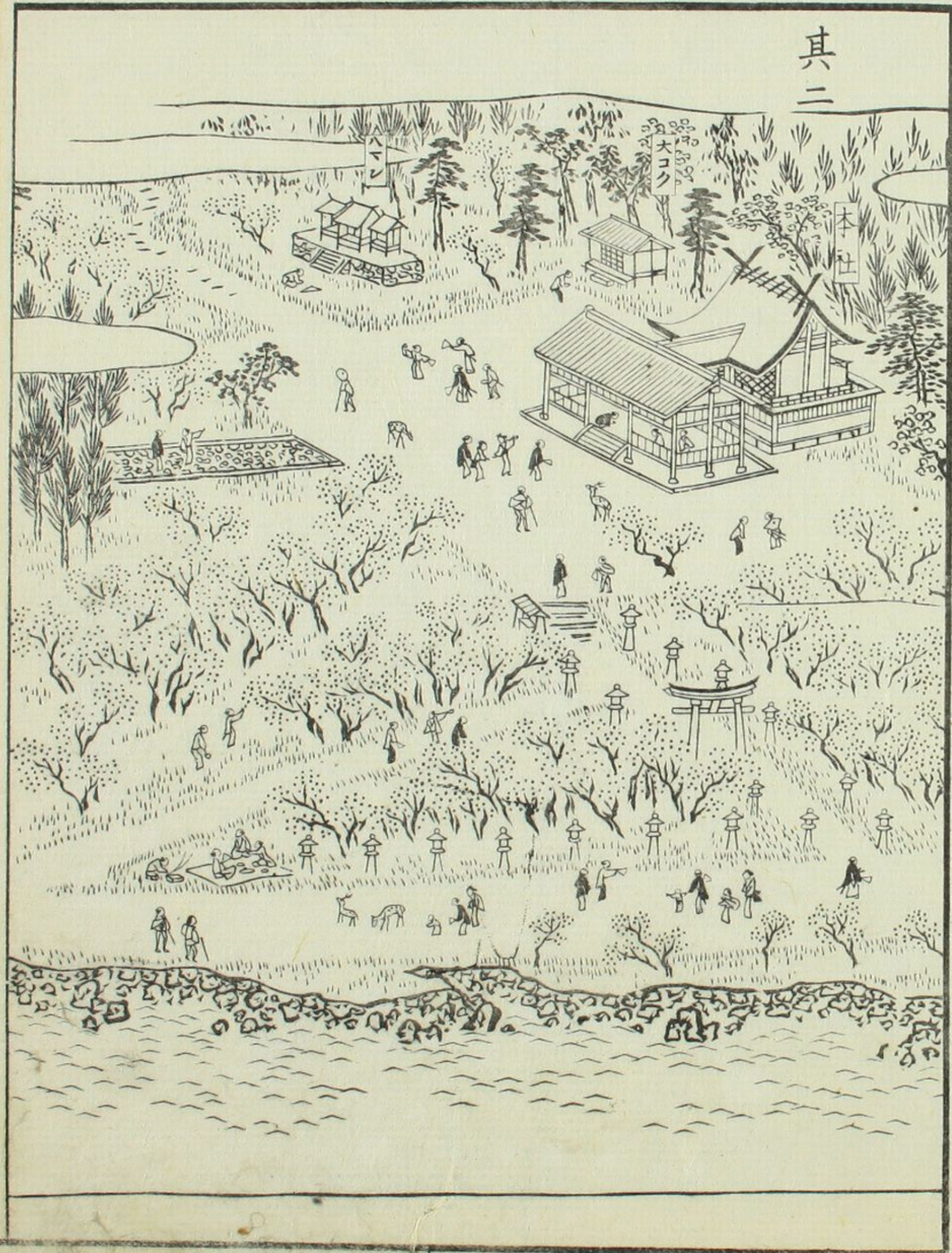
鏡釜
横堅石

横石の平清
盛公堅石の
毛利元就の
造り免のへさこ
と鑄なる文
足ゆ石の言
傳たきと実の鏡を
りそのよー大湯屋の
條に記さる今土人
角力の翫具との
ちなり



この余二守の小祠有り祭神不傳をうしなり

陰徳太平記曰其程へて和智隆實いづれもひん神前より取籠焼
草を取込て討ち来りい當社を焼拂えんと巧きり茲より元
就朝臣より近習より仕はまらる熊谷右衛門尉より嚴島より和
智討果さる謀の松幹いひ合えらる熊谷やが彼地へ渡り神
前の廻廊よりのび入和智右衛門尉が内外へ出入するを伺ひ走り
かりて無手とらむ熊谷大力をねむけも働を次廻廊まで引出
て元就朝臣の上意の趣いひせ刺殺しりり和智もはる勇士な
れがかくやると討さるまは流きども寶殿を焼んとせし悪逆より
神罰を立しる義り云甲斐なく討れ當世の武名を朽をのそ末
来い八大地獄に沈淪し獄卒の鉄棒を喫し永くの苦患遁る
る期あまらば舎茅湯谷又八久豊の理をこりて宥免はまば頼て



其二

本社

大コク

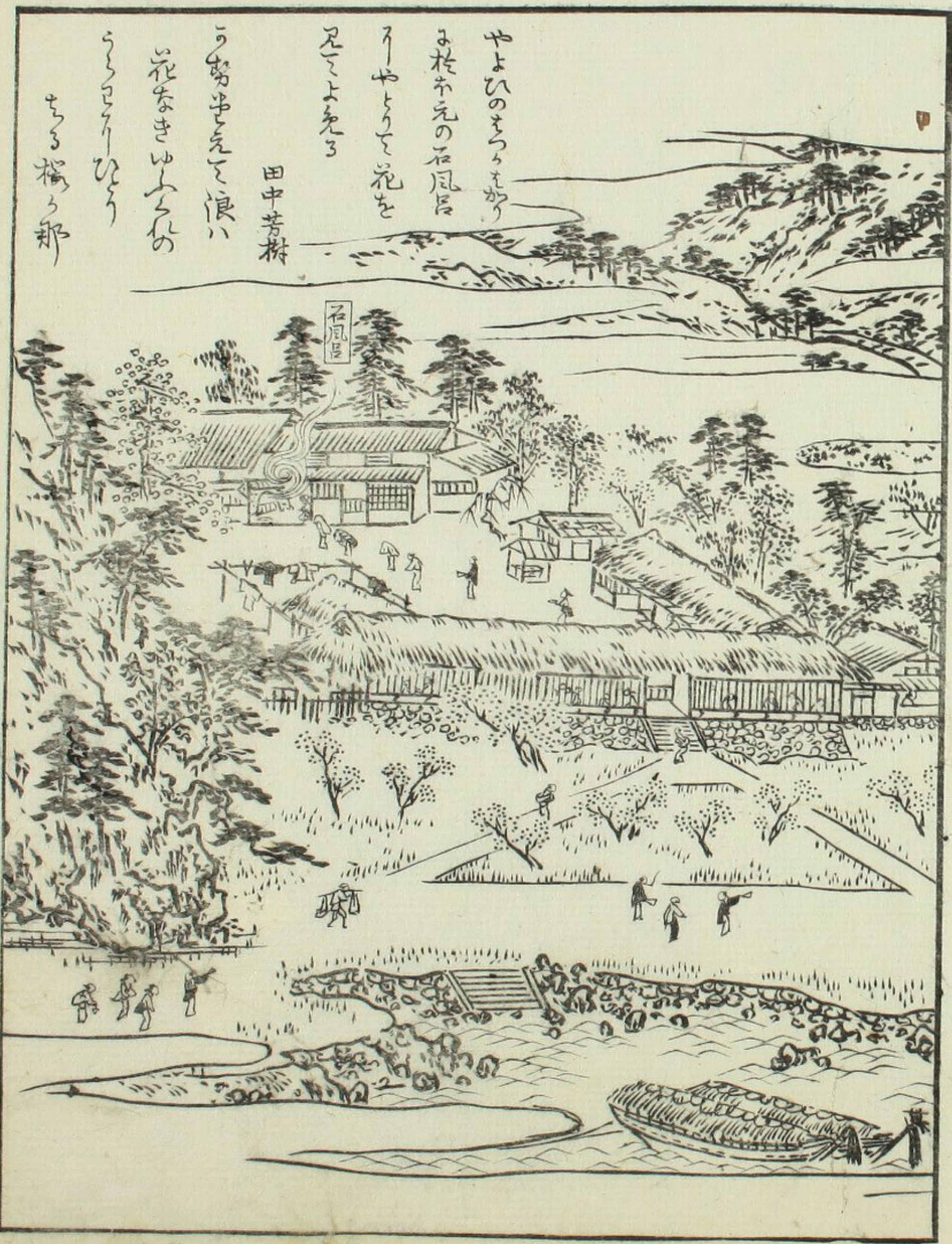
おちものじんや
大元神社

櫻

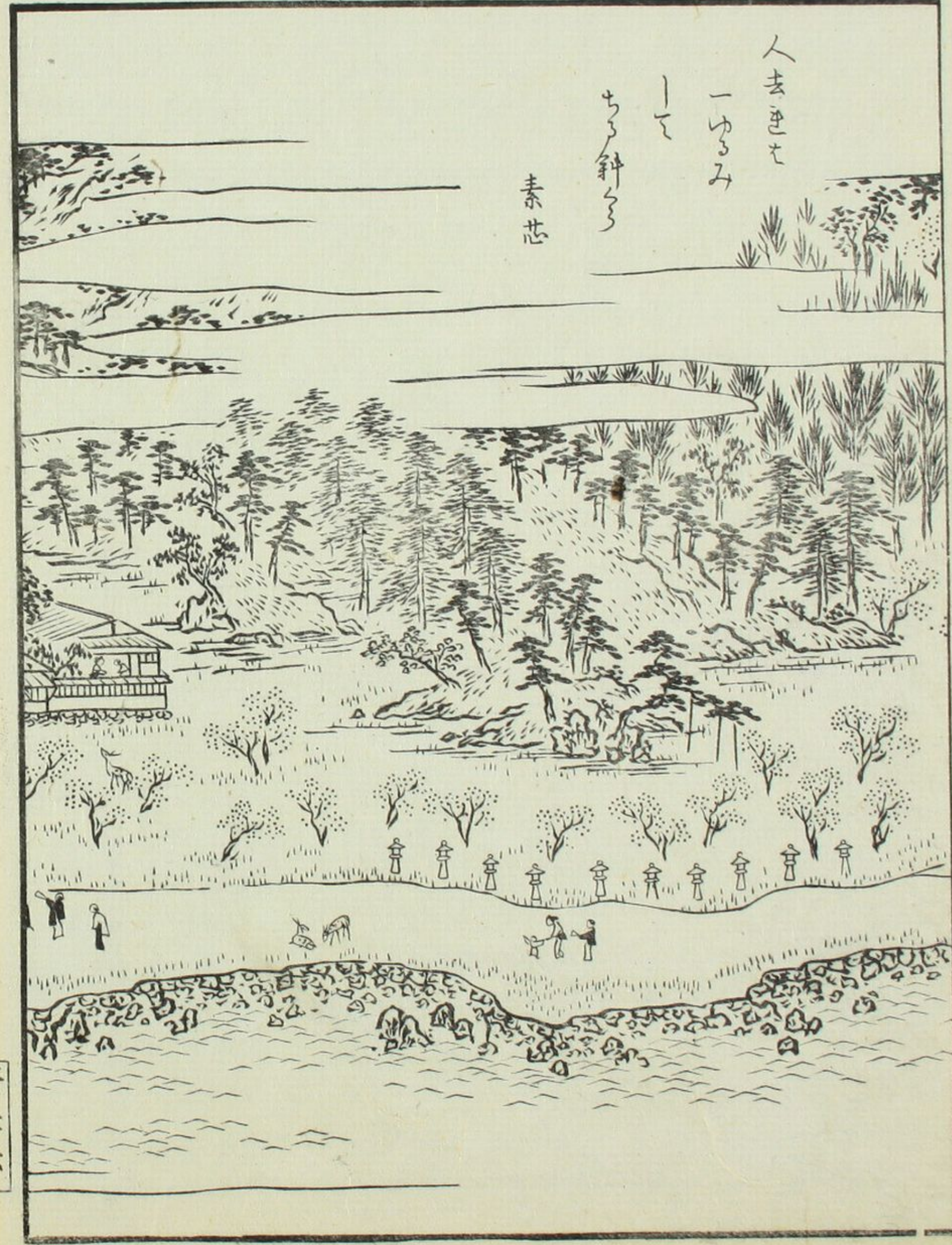
茶山

西土偽王原
姓姚天香國
色專驕傲一
從歸化并櫻
花羞愧曾來
稱僭號





やよひのまつらまがり
 みかた元の石風呂
 へやとて花を
 見よよ免る
 田中芳樹
 ら勢中をて浪ハ
 い花まきいよんたの
 らんりひん
 ちる梅う那



人去きて
 一ゆるみ
 一て
 ちる斜々
 素心

おちものさくらを
大元櫻花



ひらきを
みまろ
さあ

保原水辺
三十七

る代
あそを
花は
う那

清水
漢臣

いしまなき
日まかり花ハ
さあまろ
風朝



頭を延て切られり 郎等三人をも頭を削てりかくて 和智兄弟の
 怨霊諸人を惱しる間此島の者どもこれを宥んがため大本の社
 の名は叢祠一字を建立し神と崇むるとやこの度宝殿觸穢ま
 ようて當社ごとく作り改められ遷宮の爲吉田兼見以下向一た
 ふ其儀式嚴重丁寧ふと行ひまはる神慮のよみ秋森あつべきと
 ぞ覺えり
今昔上件下載の二社祭神はさうなうはるも一
 この寺に久その兄弟の霊社ありしを考べ

ねむ本の浦まで

うらとわみよる舟まねく尾花うな

月村翁 宗碩

大元櫻花 八景の一

みまわしき花の下陰これもまこと神のいまやこそとほまし
 んらる人やふくふく名をへはくきねえのこや 宜阿
 この炭火不浄ふまばや山ざくら 野坡

三ノ三十八

ねちもとやあむも足もさくら

風律

祠在仙山蒼波濱白櫻相映滿階春雲蒸霞散
 常彷彿一段風流仰此神
 从二位韶光

何年移植漢家種凝雪興雲萬樹奇果熟廟前
 吾要用黃鶯他日莫相窺
 僧岱峯

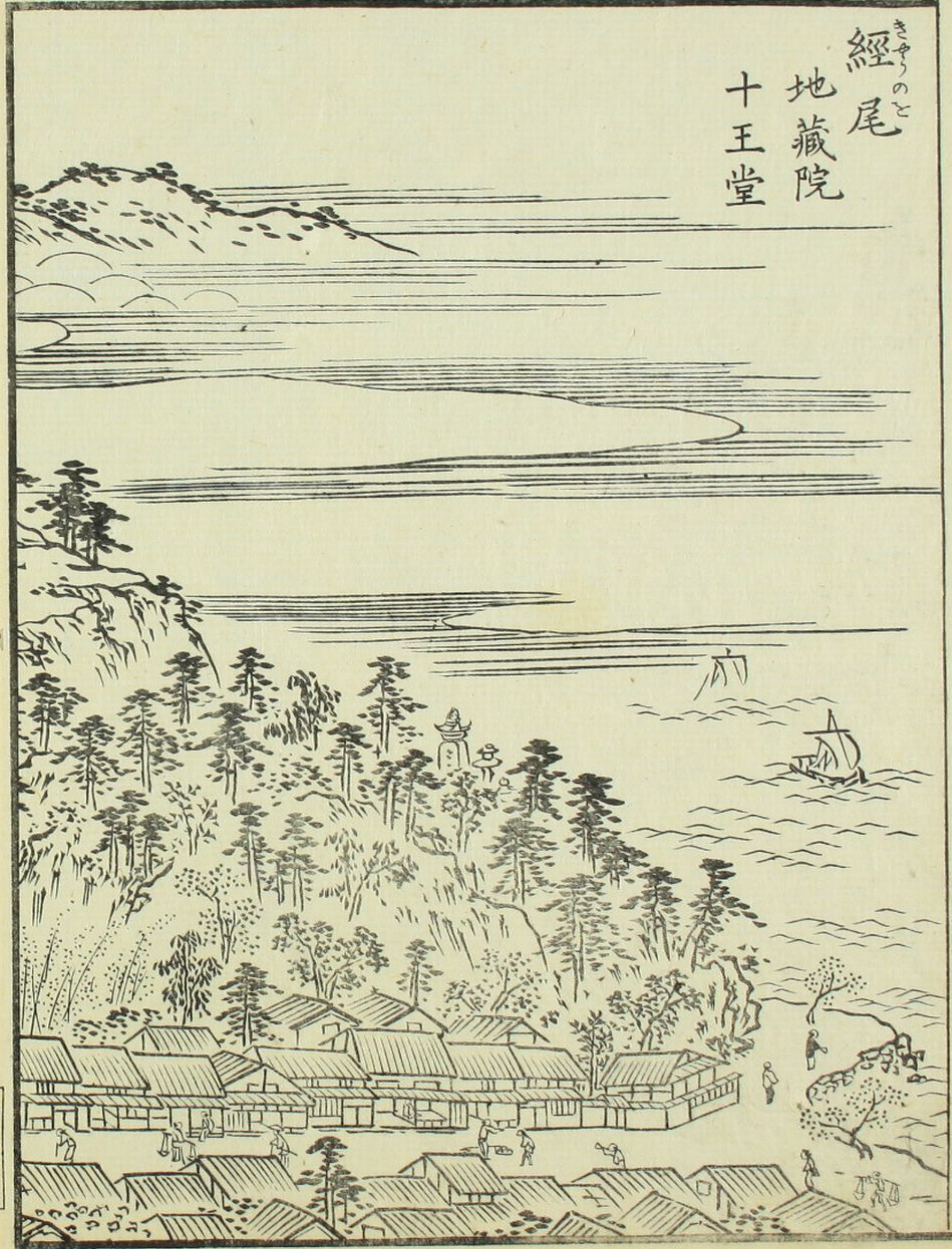
社下白櫻交影深濃雲淡靄共杳々三春祀事
 無多日坐愛千金一刻陰
 北村篤野

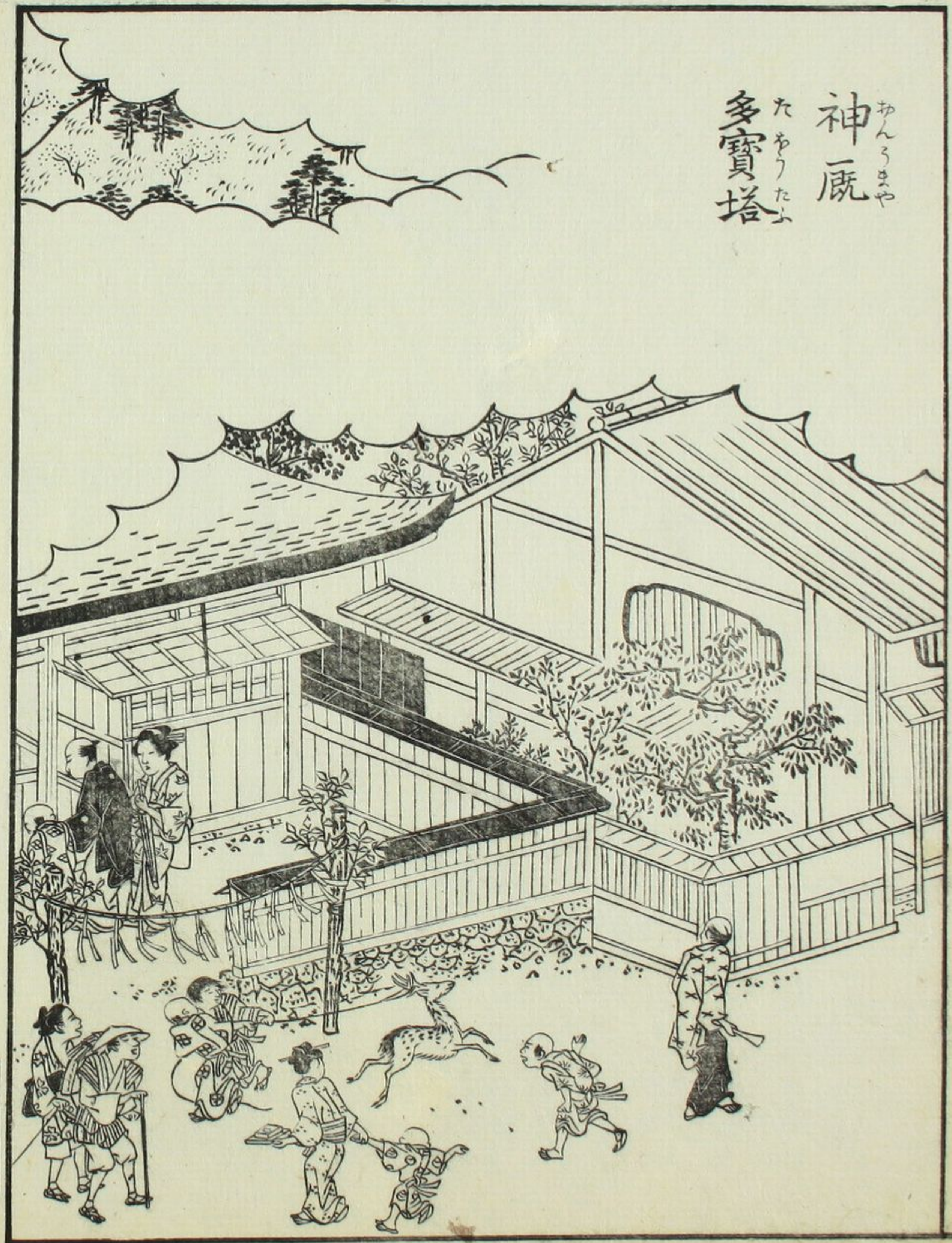
橋山 大元の上の山をいふは山山城の飯
 道祖神社 月山跡あり一幸
 あ勢山 本は屋敷あり茅屋軒を設く島内の婦人月經のと死にるを次まげ下し避け日
 をかくり然るはつこのより十日其の忌の者の穢懺となはりそむくこの島の列
 了死穢はるる次地方は避けて上をこくをねる冥慮を蔑加したるはるる後衆さう
 日暮の者い今も外は屋敷七十五日とちてこの地はうその余日を待て後衆さう
 されが神地のうさうも産穢も死穢は日一子のまはる生れんとはるはるる地方
 又出居七十あるて家さう但死穢七十五日まで島小はるこれとも前まはるる

祭神猿田彦神 天鈿女命



きやうのこ
 經尾
 地藏院
 十王堂





神厩
 多寶塔
かみくらや
 たわうたふ

家に入るとを以て産穢より重きを知らずかくてその面目はらへる日を産のうへてはるるうらひの月より
はれし子の名をいふるなりこの日まぐろ子と云ふ時びて名をなすは産穢より重きを知らず今持ておせ
山の血山なる一延喜齋式延喜齋式撰本に記す
血をかせとらう一説は悪山まじり山をいふに柱概

廢仙藏坊 あせ山の
ちまらう

十王堂 旧は
ま

廢真珠院 本は
ま

石風爐 石をたき室を作し座を六尺高とて天余藤とてき蘭とてき病を
着こねて座せしは頼り病疾を愈む功驗せし名なり

傳云もこの風呂に弘法大師弥山は於て修法のと死未聞持修行乃

僧徒嵐濕の氣は惱る所尼々是をさうり濕糸を去るに

所なりとぞ實は多載の石室より凡作は可く次

經の尾 大元(かまゆ
尾)

傳云平の清盛詩多の小石は法花の首題を書寫し叶慶は納免

一と我今も一石塔ありて其処よりまき經石を出次と何るま

たこの地の草木は枯槁せしものなりとも米樵は是の祟ありと云
いふなる所由ありて然るや〜ねぞ

西町 本社より西の惣称にしてその内北町はこから大西町神馬町
中西町久保町中江町瀧町未なり南町もこれに属す

神厩 神厩町より本殿の神
馬をつまぎたり

むりより鹿毛栗色などの異毛の馬を献むといども次第は毛を

ら〜二三年の間は白馬と成るもとより神馬の用ふれは常は厩り

繋ていごさ次この外は島内より馬をねらふ糸ざる島人時と

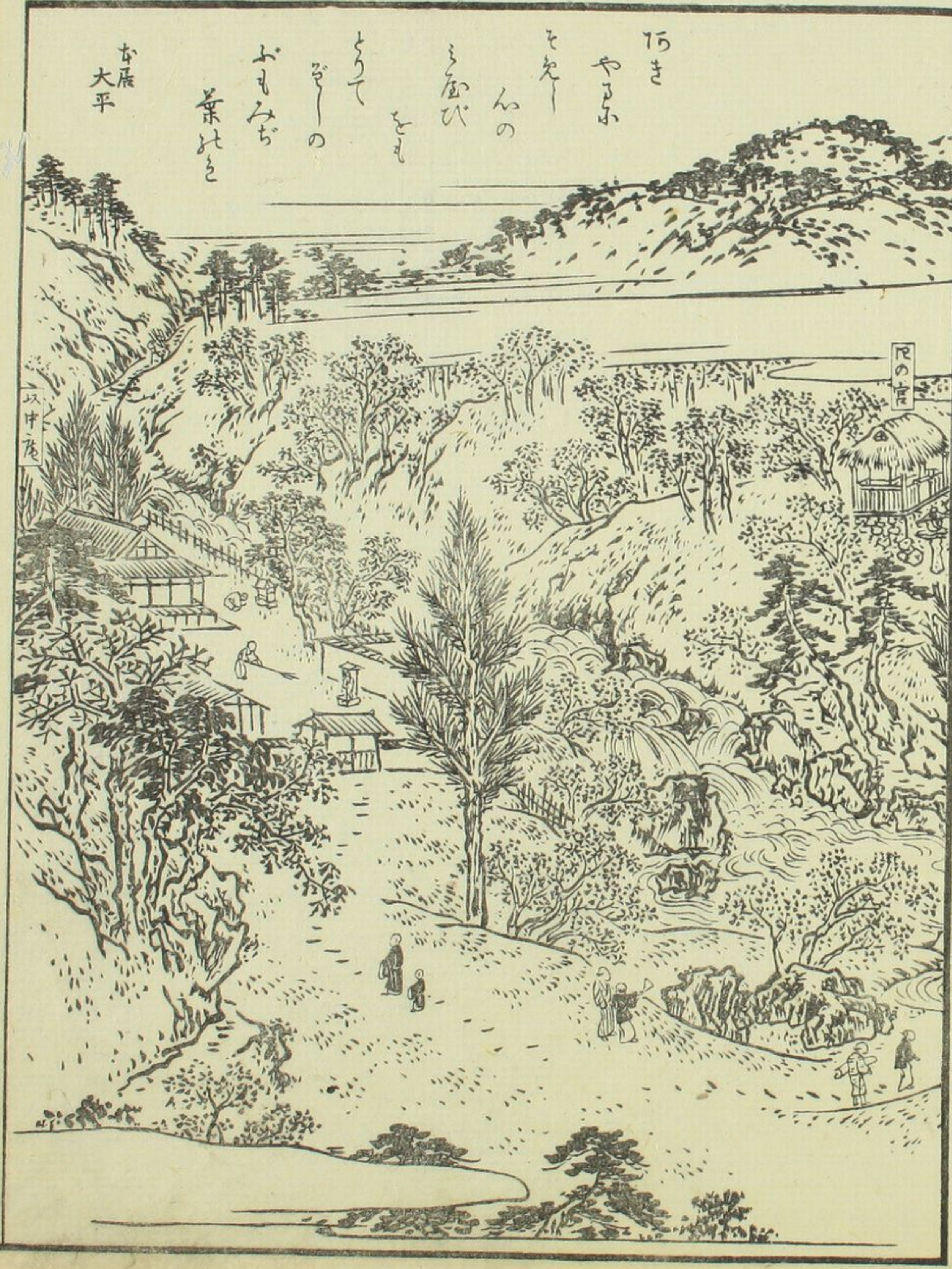
て馬背を拾ふと何り俗傳は淨神は御して深夜微行を故なり

とら田中秀年が緑陰漫筆に云白の皇國の貴色なり毎年正月

七月は行はく白馬節會も内裏式は左右馬寮各牽青馬入自

延政門延喜齋式は凡青馬二十疋自十一月一日至正月七

日二寮半分飼之と何りてその訓をも安宇宇麻とつけことな萬



古厩
大平

ふもみち
葉は

の

と

と

の

の

の

の

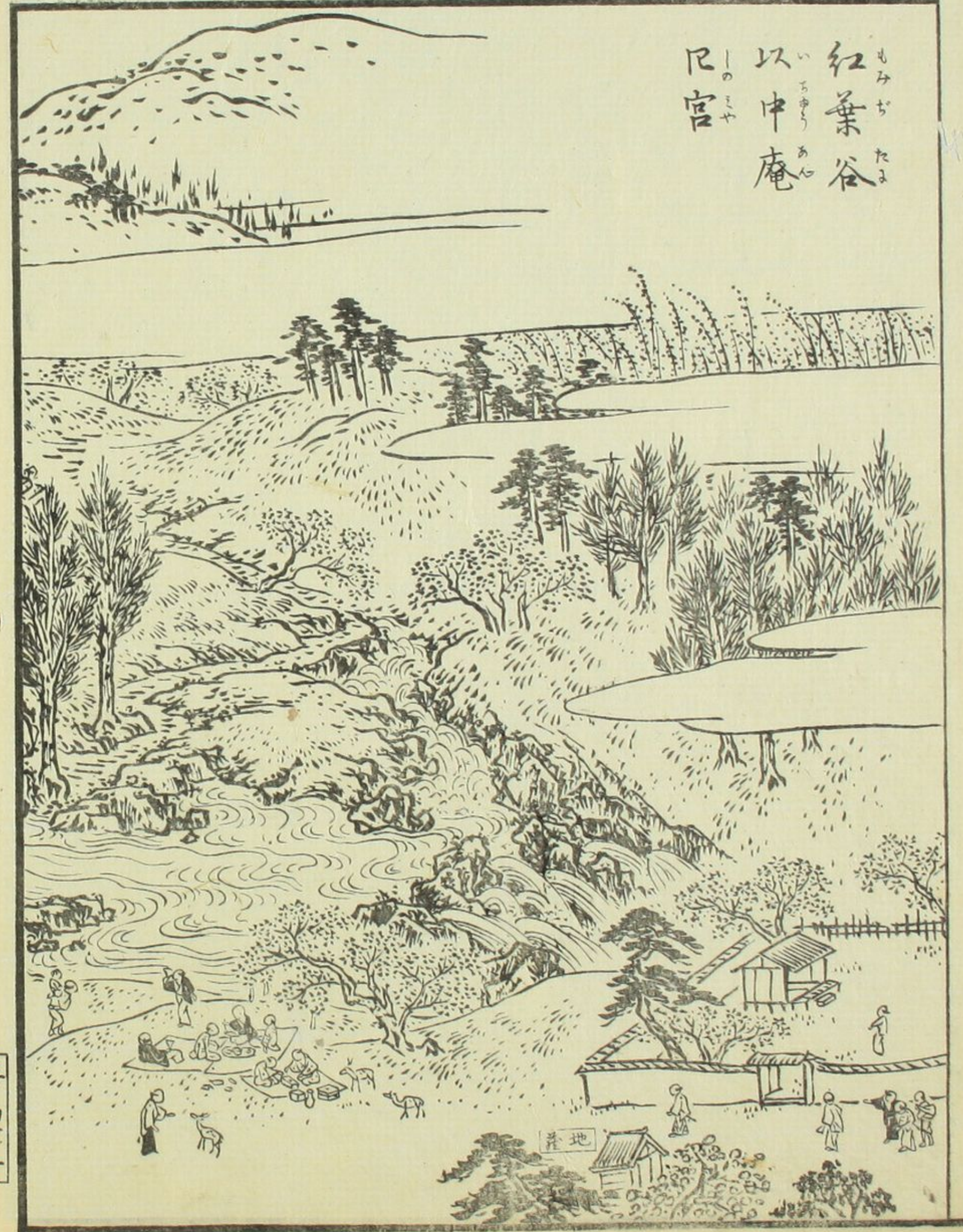
の

の

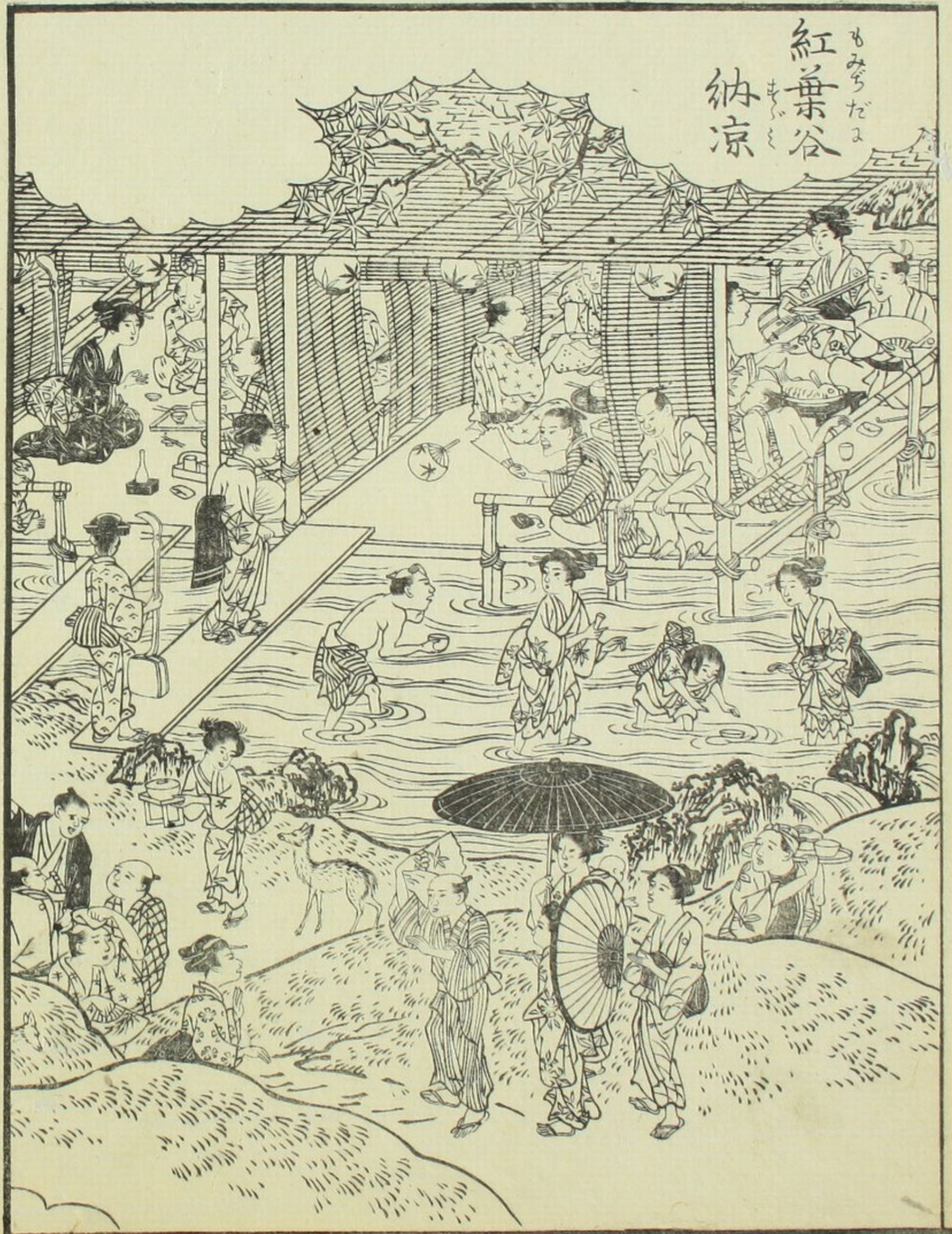
の

の

の

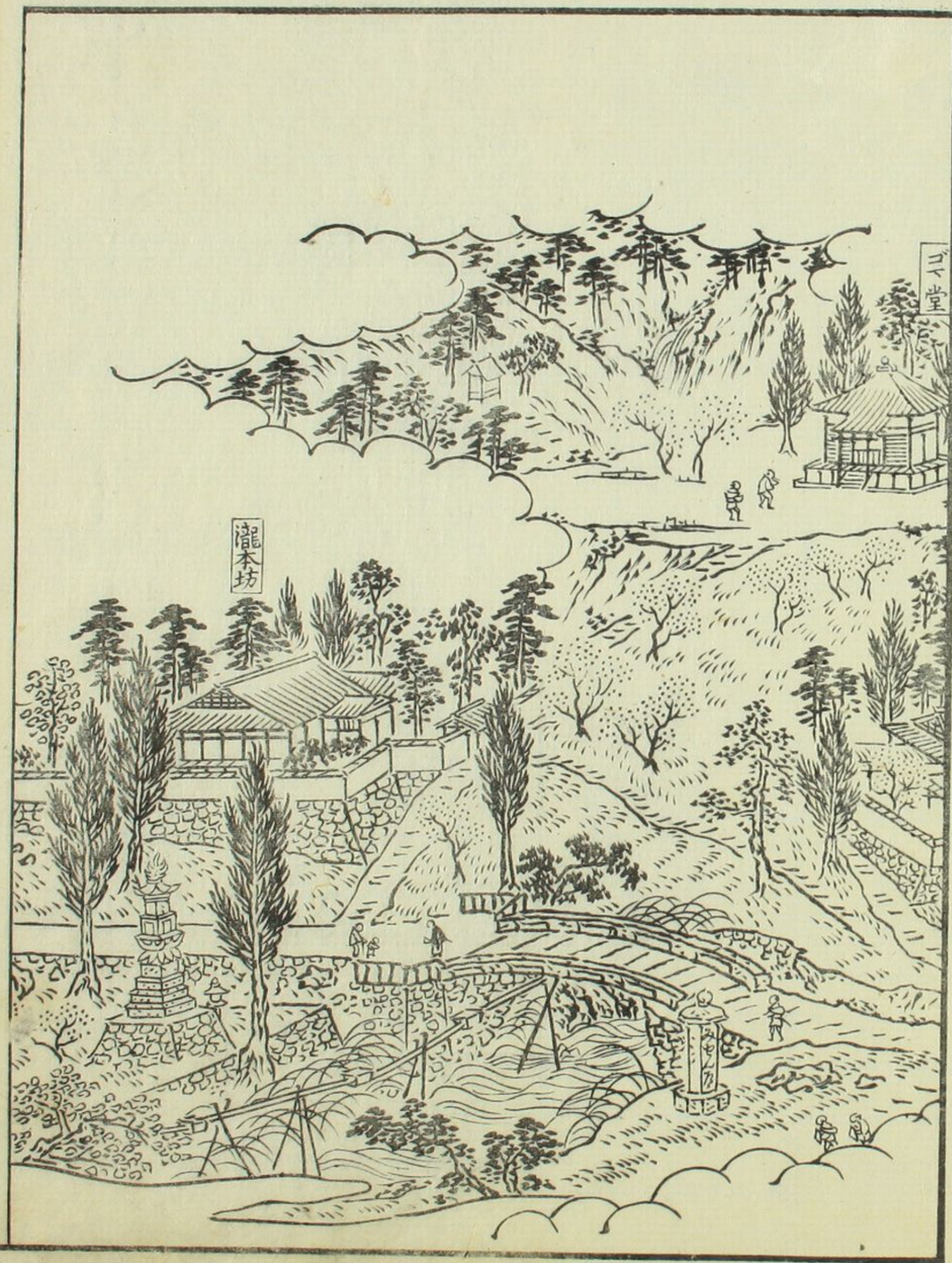


紅葉谷
以中庵
尾宮

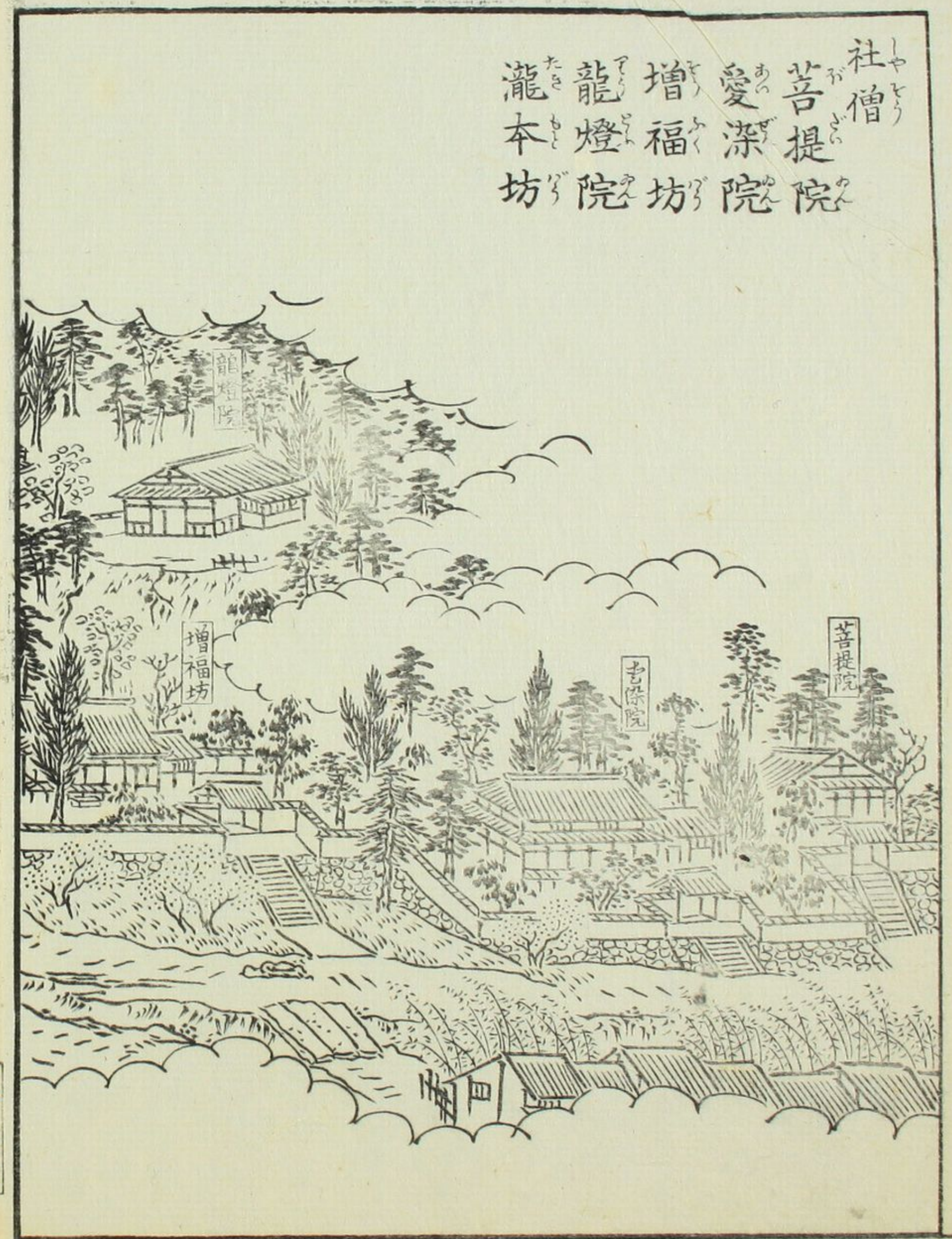


葉集卷二十の水鳥能羽結伊呂乃青馬乎家布美流比等
波可藝利奈之等伊布なごよよめれど加茂真淵の説は家持の
うも鴨のねのぐく青さ毛いろのうはといやいあうはあをうま
そく白きうまれとなれが青と白の言を初二の白いたるの
阿く如くよて実の青と白と言を初二の白いたるの
白馬を青馬ともいふなりけり河海抄又十節録云正月七日
看青馬青以白為本天有白龍地有白馬是日見白馬即年中邪氣
遠去不來まて兼盛集よふる雪よいろもはくでひくものとなが青
うまとなつらそめらん土佐日記よ七日よありぬねなごよよめれど
ふいあ知るをねもどくひなち波のうきこのまをんゆると阿
るなどその證は阿波やま日本紀神武卷よ青雲白肩津と
阿るいゝゝのゝがこいふ蓋を青と白とかよはを例ゆゑう

け源氏物語夕魚の巻よ次どきなごもいゝらうとかるのま白きを
白といつなごもいゝらうとかるのま白きを
てもな白毛よかふるこく次しき神の侍より起ることにてせそめく
白質のもの致尊ふこと馬のまはるは服色なとも然り衣服令ふ
白芙蓉とつゝ稱て集解の叙よ我朝以白色為貴色天皇服也と
いひ日本紀畧よ弘仁十一年正月甲戌朔詔曰其服色大小神事及
季冬奉幣諸陵則帛衣と載て帛衣いやぐく白色の衣なり飾抄よ帛
御装束着御事御大内之時一度召改御装束と阿るを一本よ白御
装束と阿るよて知くかく七日の御馬うつ御服のたぐひもな白なる
を以てこの社の神馬の異毛もななる次白毛よなるよまたく神の
侍なれは奇く似てあやまきあはるなり漢土のこれがう
うよて酉陽雜俎前集十七よ成式脩竹里私第園数畝壬戌年



社僧
 菩提院
 愛深院
 增福坊
 龍燈院
 龍本坊





其二
 座主
 大聖院

有蜂如麻子蜂膠土為窠於庭前簷大如鷄卵色正白可愛家弟惡
而壞之其冬果蠱鐘手足宋史言宋明帝惡言白金樓子言子婚日疾
風雪下幃幕變白以為不祥抑知俗忌白久矣といふ和漢の乃ぢめ
雪泥たのるを知べーといふ

華藏院 神鹿町より社僧あり
宝基詳らちる 本尊阿弥陀 座像法長一尺五寸
作詳らちる 服士弥勒十一面觀音 西寺

地藏院 同町より社僧あり
宝基詳らちる 本尊阿弥陀 法長一尺五寸
作詳らちる

廢連乘坊 大西町のうらより大願
寺の子院なりといふ

多寶塔 中西町圍上は建つ方二間半余
高三八間余二層なり 本尊藥師如来 行基
の作

大永三年癸未六月小冬一免々建立せりといふその後宝永三年丙戌は九
輪の再興ありき銘は嚴島湯大工野段兵衛尉公春同太郎作雅春同
小工豊嶋谷次郎治工菟陽佐西郡廿日市住山田氏久能といふ

廢多寶院 多寶塔のかどはうらよりもと
塔の本寺なりといふ

陶金姜陳所 多寶塔なり毛利氏と合戦の時陶
まづけ所を陣をとりといふ

行官趾 高倉帝幸の跡にて即今の久保町竹林内侍宅のちうちありもとこの内侍は官武内侍とい
へりこの内の内侍相國は愛せしむる女子を儲けしこと平家物語を見よ

高倉天皇幸記いそく宮内省の南のうら三ヶん口面のゆり
つらうて障子のほども海のうらみかきたるうらみかき
はまて廊どもつらうてはほしたを舟をほしよせんまな

大湯屋跡 往昔南町より社家供僧澤舟の浴室ありしゆ故ありて
廢しぬそのほまに龍町西方院のうら山に再興ありしゆこれも廢ぬ

俗傳よこの風呂再興のほたまゝ奥を商へる者来りて浴せんを請
ひよ素より凡俗のいふこと禁ぜし浴室守阿へて許さるり
あの者ひまをぬ次と入り果果しく神巫の威験たちどるはあり
て砌に植る櫛樟中より折れて倒き屋梁も摧けのりたりし者

うち殺さるるなりこれよりこの風呂もまた終ら廢しぬとぞ今大願寺の境内
一の鉄釜を遺せり經三尺七寸深さ二尺七寸まゝ風呂の横立石とりよ
り石といひ侍つされと横石より平清盛の三字堅石より巖島大風爐再興
大江元就朝臣同隆元昭書より藤原元春平隆宗永祿七年三月吉日一面
巖島大願寺圓海上人建立昭書棚守房顯客人棚守親尊と銘せり共

大願寺より

南風爐趾

これも南町よりを以て南風呂といふ
むらひ芝をまきつて浴せりといふ

徳了當島ハ山勢岨峨たるを以て清泉多一家ごとく以て是を
けつを偏に擔取の煩ひを中まもこの南町にねちらるる二丈余の
船をたへ珠が中清潔より病病をまをれ一茶一とを宝曆の
ろより廢せりといひりしきことなり

廢瑞光寺

南町より

紅葉谷

南町の奥より紅葉
子岩とて名石あり

幽邃清深より洞水の音の澄々として石上を奔り岸の両邊
楓樹多く秋されを紅錦を曝せが如し所の名實よとむら三伏
の冬暑の青糸より蔭に假庇を設け茶を煮餅をつくり涼客
炊餐を一區の勝地なり

四宮

紅葉谷

以中庵

日よりの光明
院の抱地

若宮原

同所の奥三丁をかりより一區の系あり法淨の地なりとけ系を若宮とよ
ハ若宮と号し初宇のむらりありたり

瀧山水精寺大聖院

中京都仁和寺より廢せり

本尊不動

作詳り辨才天女
上

客殿

中尊弥勒菩薩
大師毘沙門天

護摩堂

中尊不動
土弁才天毘沙

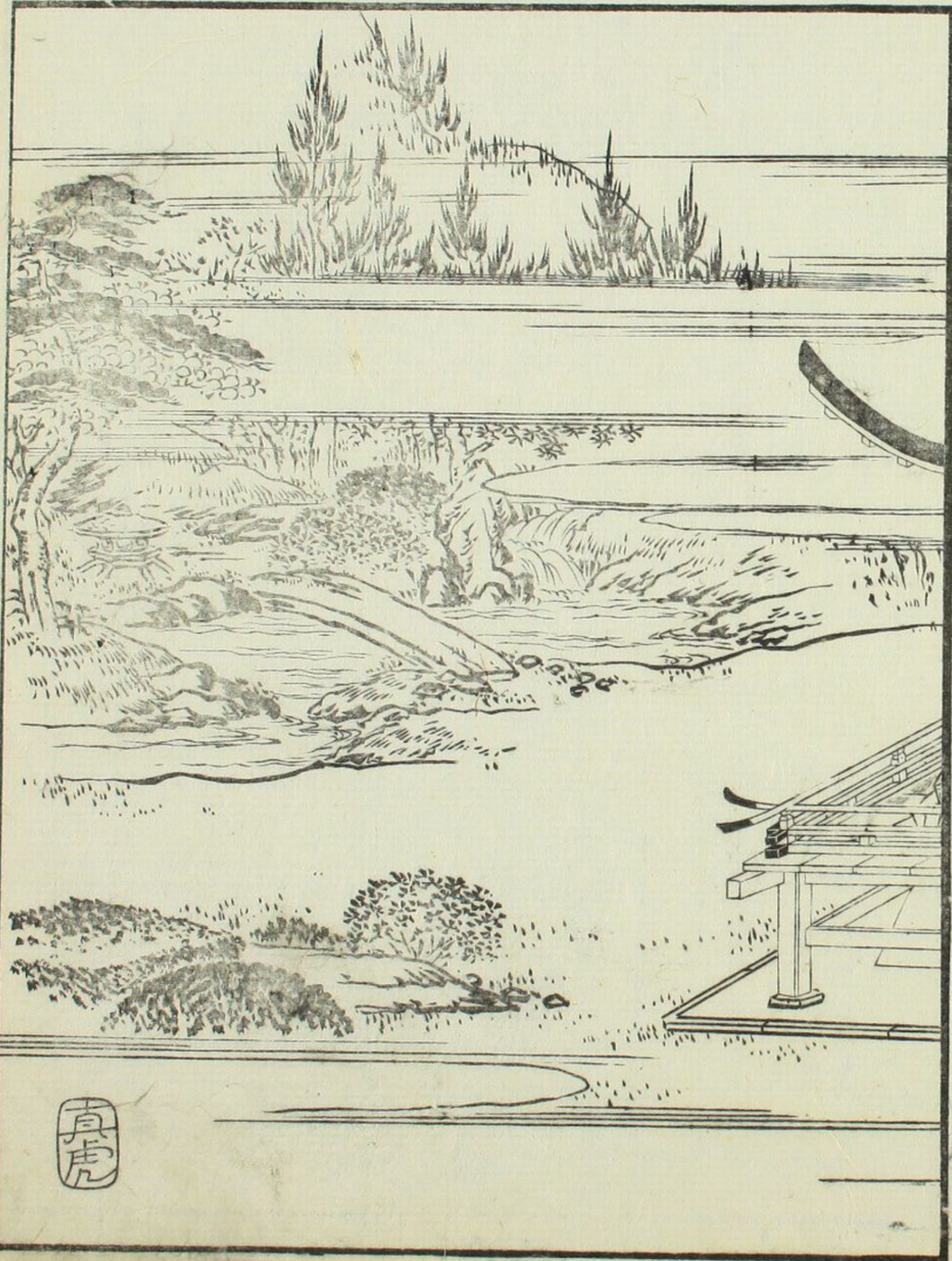
鎮守二宇

秋葉大権現佳吉
大明神園中より

正月九日連歌會

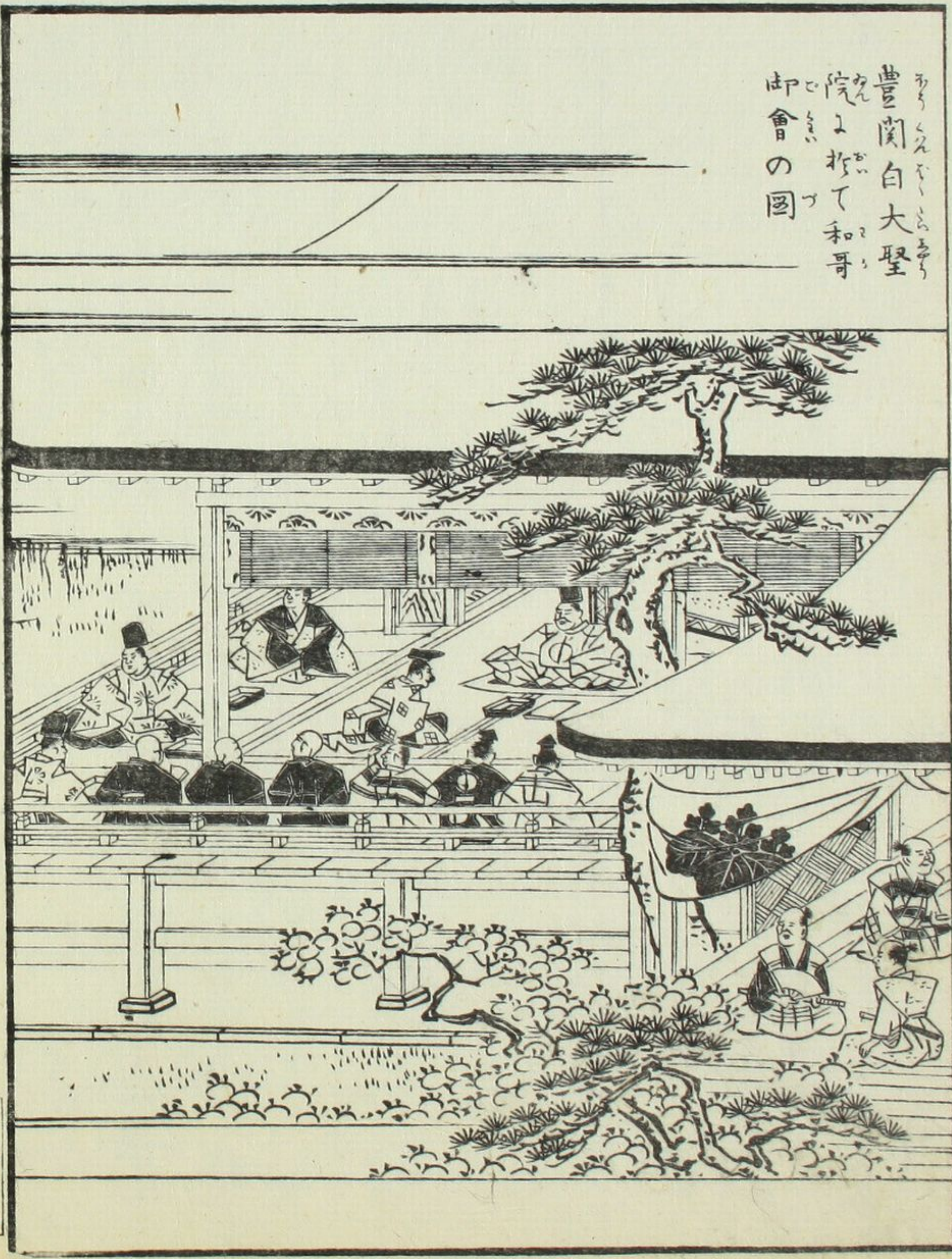
當院に於て神人供僧相集り
まを行ふ連歌始といふ

當院ハ本宮の別當職より世にこれを座主と稱む中興ハ日輪上人



真虎

豊岡白大堅
院と於て和哥
御會の圖



三ノ四十九

法卷の聞えたる如学近よてわたりし如康正二年は武田國信佐西郡の神領を攻め目神官僧侶廿日市の櫻尾の城を捕籠り防ぎ戦ひしは寇火城を羅りて書記多く焼失ぬされども灰燼の餘阿まて残るものも有りし如天正二十三年 後奈良天皇の敕院の爲記録付室を一船に取乘を都へ上りしは雷風を破らき文書僧俗とも魚腹に満し免ぬる水火の兩災を經りて典故の照し見るべきなく寺傳たりたるは故に昇基も詳らざる如き次また座主といへるも古き称より高倉天皇の清幸記に座主阿闍梨小なしたまふとあるは即ち治承の當職尊敎上人のことなり天正中仁助法親王止住せき努たまひし故を以てその如きより仁和寺院家の任を世々より承任二員使令は供

什寶

両部曼陀羅 弘法大師の筆下同 五大尊 六字名号 合躰不動愛深 弘法
 大師清影 真如親王の清筆 佛画
 當院の林泉深雅より頗る丘壑の情を養ひり豊臣關白清宗請の如も和誦の清會ありき下は載たるをんごべ

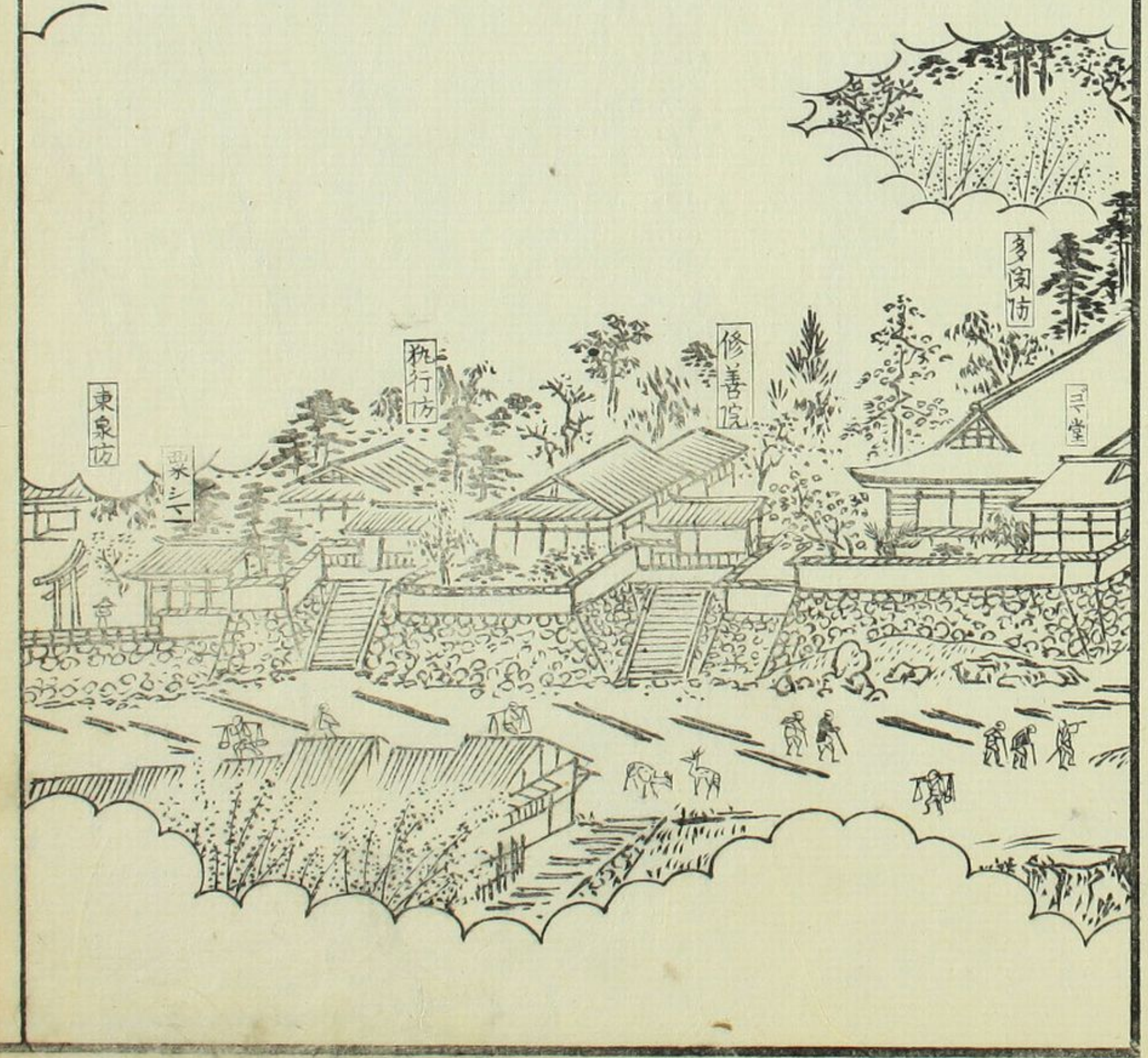
如よりなるをいふ如いづまにせやと名ふ所のうへびと 松
 子持葉もおぼぬ春の海山をまきながるゝとなりてたぐん 義経朝臣
 龜の如の山根の如を根ざりてふ代もらまなん海の如波 信張朝臣
 後にもやの葉もおぼるゝとまに浦の如と名ふ所のうへびと 頼隆朝臣
 ねもひまを如の如もよりのまにつちり残りたる花ををんごとい 香原朝臣
 たちより一葉もぬるゝ山が根ををんごや天が代をあぶらん 瑞甫
 山への如の如もひまをちりたる花ををんごの如ゆるゝをみ 克熙

ねまねくの山をたてていれが宮居なき春のなつら
 法不定如
 ねまねくはつはんなりぬる山のをのりま紙
 叔金宗
 三舟よてわい一の物のうけまらほこの浦やまの春のけれ
 法眼瑞慶
 く海ももいりてうく舞島山のちかやうな海をのうなづら
 禅高
 うちう渡むその一ま山のはらう花なりはあな海乃海面
 長吉
 名もたなき浦の宮居よ来ていれを泳ぎを残り山さくらう那
 盛月
 浦やまのたが来るとなる春の目ふながく一ともなる海波
 忠重
 ちかふたてこの一ま山はたてていれが浦をまわつる海の一と来
 正房
 神代よりちたつ一松のちかはハト由くぬもまわいたま
 賢家
 ねまねくこの海ははらうなむれなむれ一と春のうら山
 勝隆
 行舟もまむがゆたのちう知えは波も一とと海の宮嶋
 長盛
 春ぞこのころもたぬ山さくらよもたが海のちちをばはき
 三成

見まはが花をたてていれが浦をまわつる海の一と来
 勝利
 ねまねくはつはんなりぬる山のをのりま紙
 宗澄
 花のころもたぬ山さくらよもたが海のちちをばはき
 吉種
 都人よながめうれつ一ま山の花のころもたぬ名もたなき浦の宮居よ来ていれを泳ぎを残り山さくらう那
 吉徒
 名もたなき浦の宮居よ来ていれを泳ぎを残り山さくらう那
 相阿
 名もたなき浦の宮居よ来ていれを泳ぎを残り山さくらう那
 太一坊
 ねまねくはつはんなりぬる山のをのりま紙
 体重
 一つの春たねをうらむる一ま山を松にこけむまいたをたぬ
 祐宗
 海つ瀬の花よんもうちうけてうらむまはまこなるの早ゆ
 國重
 宮一まを海をのりまむれ君代よ二舟よりぬる花も一とるん
 正家
 うら山さくらうはらうなむれ宮居よまわつる海をのうなづら
 正務
 浦やまのたが来るとなる春の目ふながく一ともなる海波
 之長

社僧
 西方院
 修善院
 執行坊
 東泉坊
 多聞坊

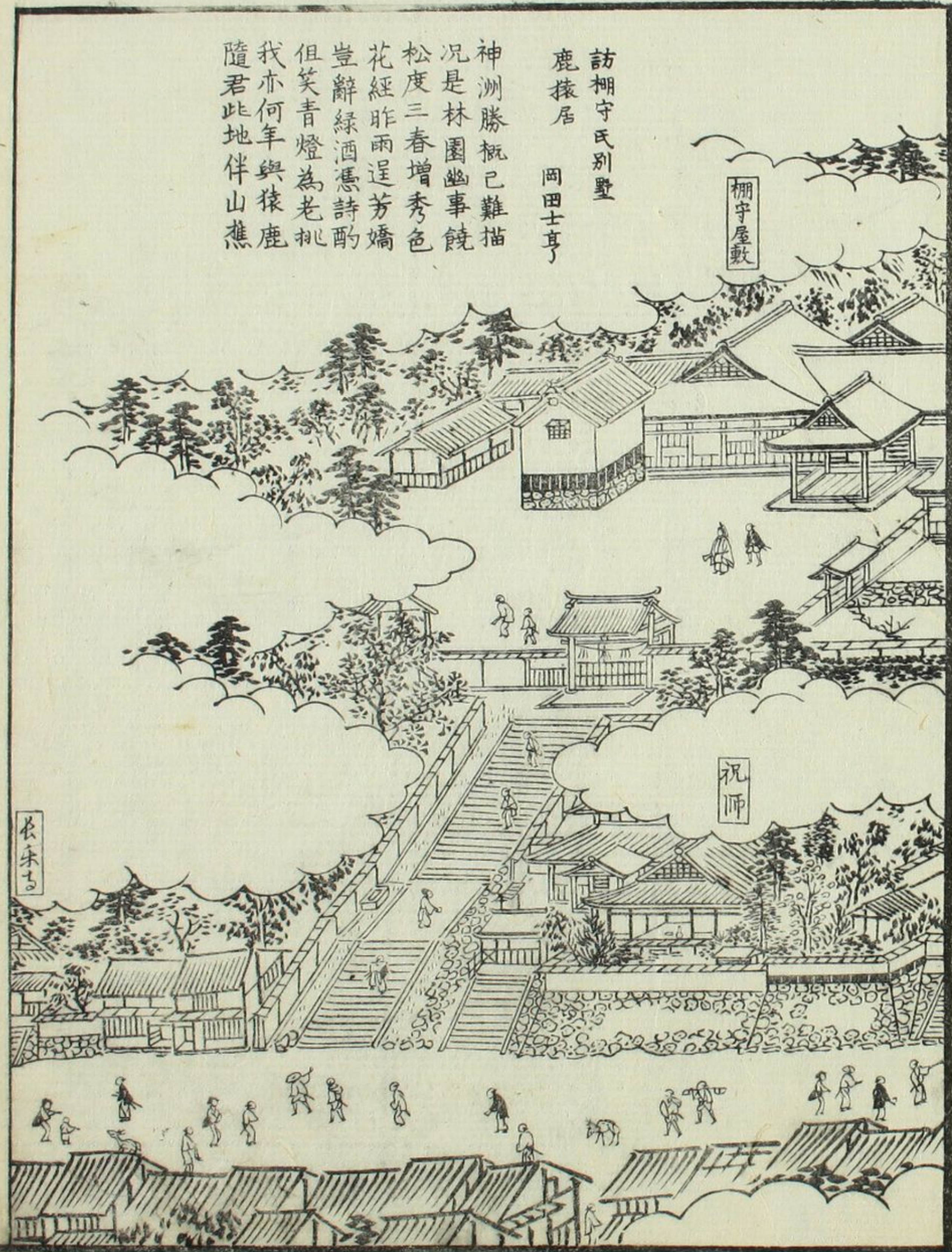
西方院
 夕月の
 岩上よら
 麻のくけも
 おちろ
 庭の替
 岡田清



其二



訪棚守氏別墅
 鹿猿居 岡田士亨
 神洲勝概已難描
 况是林園幽事饒
 松度三春增秀色
 花經昨雨逞芳嬌
 豈辭綠酒憑詩酌
 但笑青燈為老挑
 我亦何年與猿鹿
 隨君此地伴山蕉



つらういと松をきなる石あり苔むし物ありたるうまひも
 一後き松ひらうたうりつらうたをばこの年のこのはも有りな
 んこまのいりたるんたかみの人もえやの松よまうらうる種
 一阿まの山石もとせなうらうれ

今按この文あり坊とあり記して寺号をいふはとも島内の林泉才一の佳
 るの當寺の西方院ののみ兩寺のあり今案うごごといども暫くうら引
 後の老を

瀧本坊 大聖院の替より社僧 本尊十一面觀音 佛長五寸七分 昭士不動 佛長三寸八分 毘沙門

龍燈院 佛長三寸五分 天和年中京師仁和寺の末流とせり 毛利輝元卿との書翰のまを藏せり 本尊不動 佛長三寸五分 弘法大師の作 昭士矜羯羅制叱迦 佛長一寸五分

相傳ていたく當寺の本尊の弘法大師一刀三禮の佛作よりて往時大
 同年中弥山に於て虚空藏求聞持備法の時一坐座の護摩備法
 ありき故を以て自ら彫刻したまへし靈驗今不可思議と

いふ

龍燈杖 同寺より往昔龍燈の柄がけりよりをいひ傳ふ今

増福坊 中西町より天和年中京師仁和寺小幡次屋基詳なる次 本尊不動 佛長一寸

愛深院 増福坊より社僧 本尊不動 佛長一寸五分 天和年中京師仁和寺より属次屋基詳なる次

善提院 佛長二尺一寸二分 服士矜羯羅制叱迦 佛長六寸四分

當寺の兩宮の常夜燈杖よび常番杖掌る昔毛利氏より常燈料

を寄せし書の翰あり

西方院 佛長七寸 服士矜羯羅制叱迦 佛長七寸

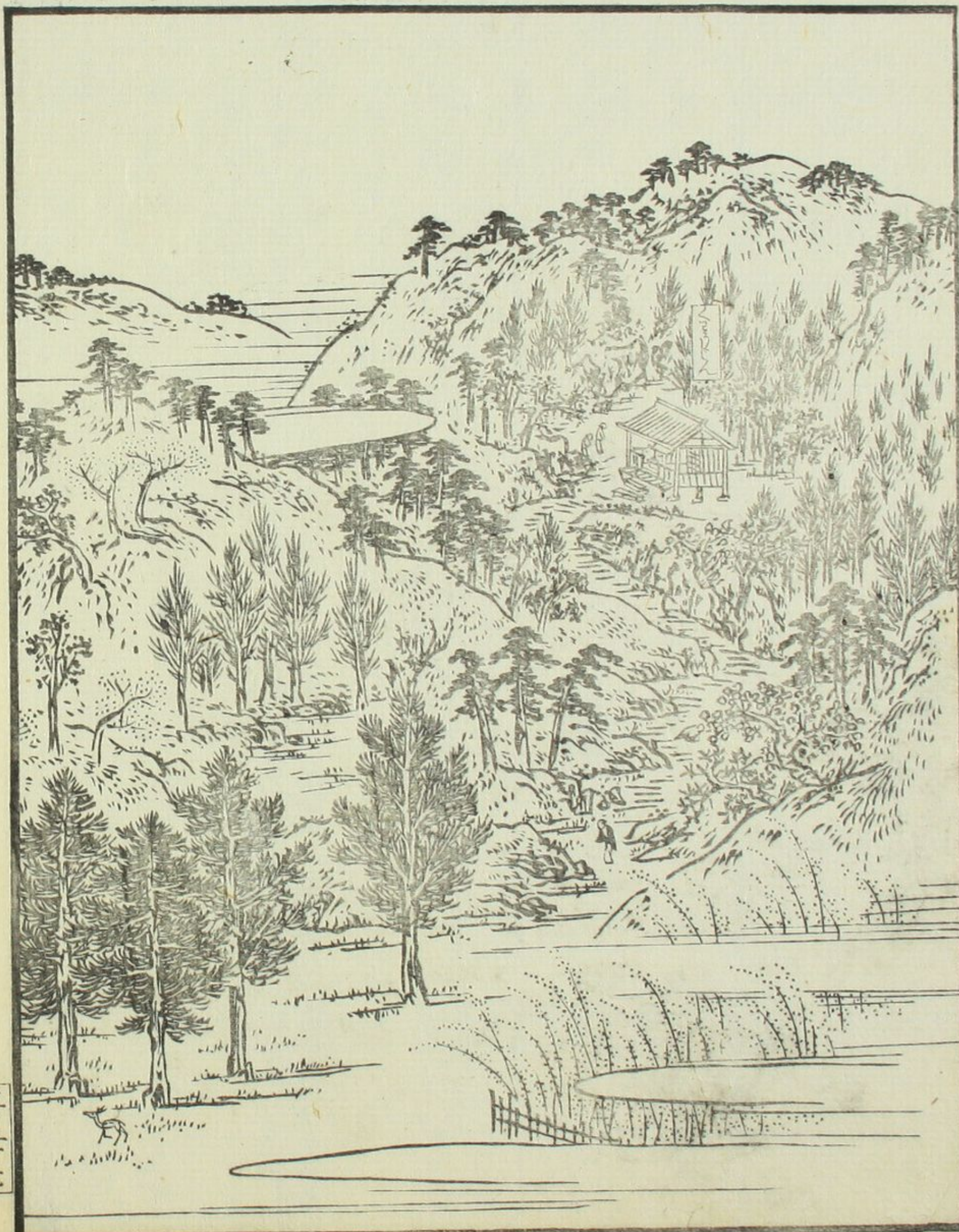
古法眼画屏風 土佐光起画 同光成画

當寺のよりの東坊と稱せり天正年中仁和寺の佛室仁助法親王

の島は止住あり故を以て西方院家の号を賜ひて法下小准
せられし抑仁助法親王とまうりたてまつり伏見宮貞敦親王乃
法子小ねをいま後奈良天皇の法猶子なり紀竹の園生小ね
ひたせたまひし佛門に入らせたまひしと何のあう事とを
法身なれと法法流法再興の法志願ふくねりましくふより斗
藪行跡の墨跡は法衣をやりまひ王敷の都をめぐりて西國の
うに法下向ありし當島大聖院良辨の遺身良政知し法
誓之堪一さうし示論教授の法為まつひはは島は法留錫を
したまひたり世ごりて嚴島御室と稱し奉り紀然るにらん
ともいご紀無常轉移の世のまひた假初の法遠例と見えし
目を逐て息させたまふ法系をなれば大聖院ハ叙つたうも死
穢を忌むと神人よひと後ハ遠は法病林を當院一とす

てはづら一日二日三日の露とたせたまひぬ即ち法遺體をば
赤崎といふ所は掩葬しなりぬ今もその地を法宝山といふある也
この故とをん ○大元社 境内子勅
當院の林泉ハ雪舟の作しそをなむ古雅なり加賀の三子風といふ
の記をつらみ称賛せりその文今畧次
多聞坊 龍町はあり兵基詳々 本尊毘沙門 弘法大師の作 昭士不動十一面観音 二尺六寸
五分〇當院ハ弥山の女教あり 天和年中仁和寺ハ属次
修善院 本尊釈迦 法長一尺七寸〇この坊ハ控律師増弁補 職の状吉川元春の虫轡などの古文存あり
執行坊 日上 本尊不動 法長一尺二寸
東泉坊 日上 本尊薬師 法長三寸 春日作 昭士十二神将 法長各一 寸六分作 ○鎮守栗島大
明神社 境内あり
什宝 具利迦羅不動一幅 弘法大師筆の外ハ毛利家より寺領 寄附の状等あり

瀧の薬師





中江葉師
ちゅうけいのかくし

弘中戦地
ひろなかのいくばく

陰徳左平記曰 上畧 弘中三河守同中務少輔の本社の没なる観音堂の
 色より入道引別は流小路を没して、五百余騎を二段は俣
 へ追来る敵を待ける所は一番は吉川治部少輔元春追懸たま
 ひるるを足す弘中父子元春戦死と思定免しことなれを何の命
 救もなく暮直はあてくる吉川の先陣案をくわす十回引退き
 多しの元春へのいふもとて自ら鎧を以ておきたてかり終ふ弘中父子
 も能敵たると同は怒り味方をいさ免鎧を提げ案合たり之れを
 見て吉川勢宮庄今田粟屋境朝枝森服の者共命を塵故よりも
 軽しく切て入る故弘中父子案立れ瀧小路へ引退くを元春つづ
 て次々追ふる所は柳小路より青景彦九郎波多野弾正忠町
 野元康(右)夫尾和兵庫頭等三百をかり横合は案てかり吉川勢危

く足元一が熊谷伊豆守天野紀伊守於これ馳り来り渡り合て戦ふる
あひつらまうあをうけいげふ 間弘中青景日下後より押立てて進み得む弘中へはる古兵な
たきこうち りろれを瀧小路の左右の家より火をのけその給きより引もろり元
へ 去れ弘中をば遁次とも苦しくし神殿を焼きたとて敵より
け 目もろけを此火を消さば隙より弘中へ大聖院のうへまで引退
しげ へ暫くおへ合戦の成行果を窺て息絶てこそ居ろりまき

中江薬師 ちやうえやくし 中江町よ

若宮 わかし 日本勝谷某が敷地ふらう信くいふ蘭金姜の靈崇うをたよらうて後よけりよその靈をまつうろ毛利兩川の三
将をもともは奇ひをうらうを神威灼然社内の物とたまひの慶友のいふらちも取れらるる次崇あり

牛王社 ごおうしゃ 同上 祭神猿田彦大神

廢永元寺 えいげんじ 中江町の奥より

嚴島笛會卷之三終

